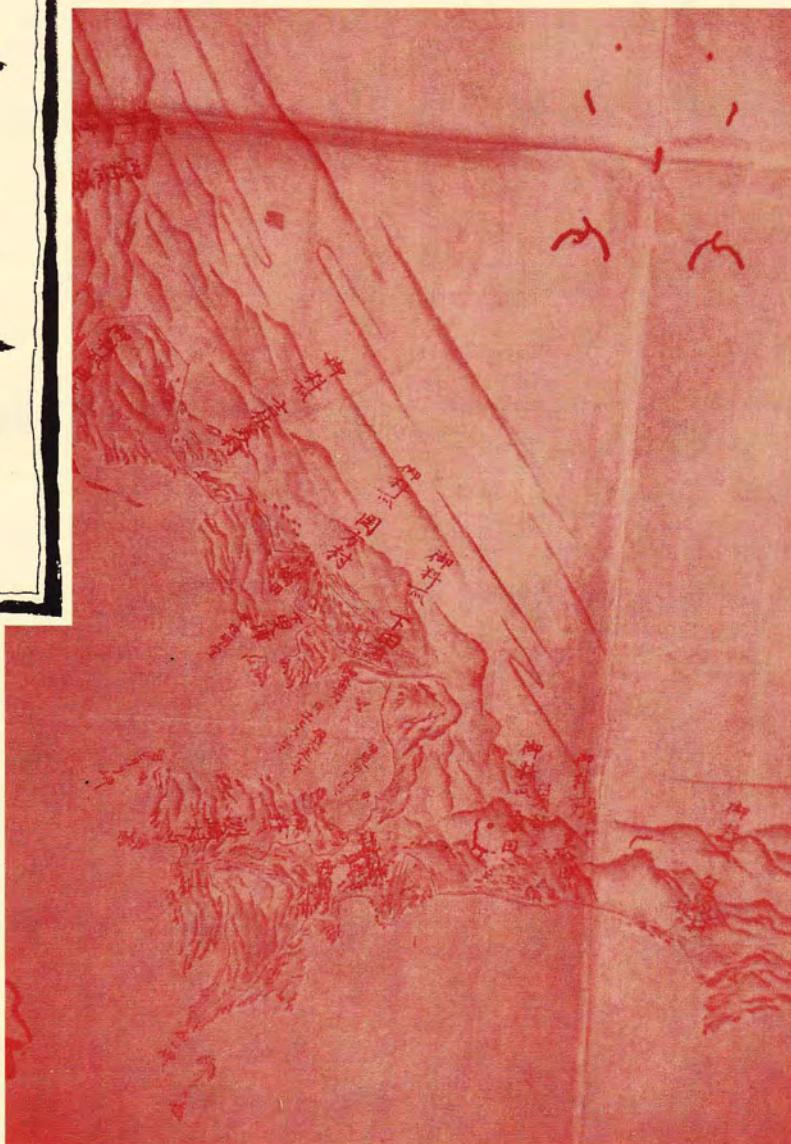


伊能忠敬研究

研究

一九九八年冬季第一四号

季刊 史料と伊能図



伊能忠敬研究会

目 次

(表紙写真解説) 目次

佐原時代の忠敬の「歴学」
伊能忠敬の「測量日記」に見る
五島の歴史と風土

川尻 信夫 1
的野 圭志 6

史料紹介

伊能家文書紹介 七

●お信さん(つづき)

●名乗書

参考資料の頁

研究会ニュース

連載・第六次測量日記 七

伊能図探求 十四

伊能図入門 (一)

入会案内・編集後記

安藤由紀子
伊能 陽子 15
佐久間達夫 10
編集部 18

渡辺 一郎

佐原の伊能忠敬記念館には、文化元年に提出され将軍家斉が上覧した日本東半分の大図六九枚の副本(控え図)が完備して現存する。本図はその一部で、重文番号三九自江戸・尾州・北国到奥州沿海図の第四図(伊豆国図)の下田付近である。伊能隊が伊豆半島を測量したのは、第二次測量と第九次測量で、最終版の文政四年提出図では二度の測量結果を総合して作図されたが、本図は第二次測量のデータのみによる作図である。

だいたい海岸線に沿って測線がとおり、周辺の風景が絵画的に描かれている。砂浜とか海岸を通行できる場合は測線は海岸線をとおっているが、踏査が難しい部分は道路を測り、測線と沿岸の概略の位置関係を風景で表現する。

下田と洲崎村の☆は天測を実施したことを示し、△は湊を表す。

大図では村名の上に領主名を記すが、図に見える村々は御料とあります。幕領であることわかる。下田奉行はこのときは廃止されていたから、代官・江川太郎左衛門の支配地だったろう。

図中に多少虫食いがみられるが、同館蔵の文化元年大図は全体的に綺麗で、質と量において伊能図の圧巻である。江戸東京博の「伊能忠敬展」では实物の一部が展示される見込みである。

(渡辺)

(題字は忠敬の筆跡)

(裏表紙) 英文目次

佐原時代の忠敬の「暦学」

川尻 信夫

(一)

平成十年春に新しい忠敬記念館が開かれるが、ここには忠敬の業績を紹介するマルチメディア映像システムが設置される。私はこのソフト制作のお手伝いをしているので、その資料収集のため、平成九年にはあちこち旅をした。どこへ行っても感じたのは、忠敬のエネルギーの凄さである。たとえば、大分県の山奥から阿蘇へ通ずる旧小国住還では、タクシーが閉口するような急勾配の山道があつたし、室戸岬の近くでは断崖が直接海へ落ちこんでいる所が多かった。こんな所はただ歩くだけでも大変なのに、神経を集中して測量して歩いた老人忠敬の馬力には、まさに圧倒される思いであった。これらの旅は、資料には直接結びつかないことがあったとしても、忠敬の歩いた道をそのまま辿ってみて、その場その場で感ずる何物かが映像作りに役立つにちがいないという思いもあって出かけたのだが、その意味では得るところが非常に多かった。

忠敬測量隊の足跡、忠敬個人の生い立ち、また佐原時代の生活、さらには伊能図の特色やその所在などについては、かなり細部まで研究されている。それにくらべれば、忠敬の学問の内容や程度はあまり研究されていない、少なくとも一般人向きの解説はされていない、というのが私の率直な感じである。早い話が、暦学と測量はどう関係するのか? 緯度一度の正確な長さを知ることが正しい暦を作るのに必要だから、というが、では、なぜ必要なのか?さらに、上の答えでは、緯度一度の長さを知ることは測量の目的であろう、実際の測量技術と暦

学は関係なかったのか?また、忠敬は測量術をどこで学んだのか?高橋至時に学んだと述べている本もあるが、至時は暦学者である。その至時が測量術を知っていたのか?これでは堂々巡りである。

このような問題はほかにも数多い。私はいま、この種の問題を取り組んでいる。つまり、今まで明らかにされていない、又は一般向き説明がなされていない理論や技術を理科系の立場から解明し、できるだけわかりやすく映像化することである。どこまでできるか心もとないが、実務にあたる方々と協力して努力している。

これと平行して、私は、佐原市に委嘱されて忠敬の蔵書の整理も始めている。現在はまだマイクロフィルム版で存在の確認をしている段階だが、それでも何冊かでは忠敬の書き込みを発見して、彼の肉声を聞く思いがして楽しい。それだけではなく、書き込みの有無によって彼の勉強の重点の置き所もわかるから、研究上でも役に立つ。解題が終るまでには二年くらいはかかるだろう。こんな具合で、このところ忠敬忠敬で明け暮れている感じだが、佐原で生まれ育ち、佐原をこよなく愛する者の一人として、忠敬研究に少しでもお役に立ちたいと思っている。

(二)

忠敬の学問を探る手始めに、彼の佐原時代の暦学を取り上げよう。忠敬が佐原時代に独学で暦学を学んだことはどの本にも書いてある。しかし、その内容は、程度は、という問題には誰も答えていない。これがわからないと、江戸での勉強の意義がわからない。

彼が高橋至時について学んだのは、普通は単に「西洋暦学」と言われている。しかし、それが忠敬の既習知識と、どこがどう違うのか?それが問題である。彼に大きな影響を与えたと思われる書籍で蔵書中に現存するものは、「崇禎曆書」「靈台儀象志」「暦算全書」「暦象考成上

下編『暦象考成後編』などだが、これらのイエズス会系暦算書は、その成立の時代的・政治的・宗教的背景から、簡単に「西洋暦算書」とは言えない面が多い。科学史屋としての私は忠敬が専門ではないが、以前に大雑把ながらこれらの本を調べたことがある。その知識から言えば、『崇禎暦書』は西洋側から東洋への一方的歩み寄りの面が強いし、『暦象考成上下編』は、中華意識というフィルターを通して、東洋側が西洋の材料を一方的に解釈したものという匂いがする。これは成立の事情から来た結果で、この特異なスタイルが日本人に幸いした。もし完全に西洋スタイルだつたら、たとえ漢文で書かれていても、当時の日本人にはおそらく理解不可能だったろう。さらにまた、これらの暦書には測量術が少し含まれているという特異な面もある。忠敬の測量術の根幹をなす方法の、少くとも基本的発想はこの中にあり、その幾つかは映像化可能と思われる。このような指摘は今まで殆どされていないが、漢文の暦学書など専門家以外には無縁のものだから、それも当然であろう。

上述のように日本人に理解され易い形で書かれていたとはい、これららの専門書を読むには予備知識が必要である。忠敬の場合はどうだつたのか。測量術などの問題は別の機会に譲って、ここでは彼の佐原時代の暦学勉強について述べたいが、その前に、暦学とは何かをまず説明しておかなければならぬ。

現在、世界の殆どすべての国で公式に使われている暦は、太陽の運行だけを基準とした太陽暦である。いま仮に、閏年をなくしてみよう。すると暦は四〇年で十日、百年で二五日早くなるから、そのまま進めば、北半球で正月が真夏に来ることになつてしまふ。季節の移り変わりと曆面の関係は常に一定にしておかなければならない。特に農業社会ではそうである。暦学はこの必要性から生まれた。

忠敬時代に中国や日本で使われていた暦は、太陽と月の運行のどちらをも組み入れたもので、太陰太陽暦という。この暦の仕組みを極めてラフに説明すれば次のようにある。

月は約一九・五三日で満ち欠けを繰り返す。これを一朔望月といふ。太陽は約三六五・二五日で地球の周囲を一回転する。（一太陽年）（実際はこの逆なのだが、昔は天動説だったからこう考えた。暦では太陽・地球・月の相対的位置だけが問題だから、どちらが中心でもかまわない。） $29.53 \times 12 = 354.36$ だから、十二朔望月を一年とすると実際の一太陽年より約一日短い。一朔望月を暦の一月（ひとつき）とすれば、朔日（ついたち）には月が出ず、十五日に満月になるというような月と日の関係は一定だが、太陽との関係は毎年一日だけ移動する。 $11 \times 3 = 33$ だから、三年目に臨時に十三月を置くと季節の狂いは一ヶ月減つてほぼ三日になるから、狂いは常に一ヶ月以内に納まる。これが閏年の原型だが、時代とともに研究が進み、十九年のうちに七回閏月を置けば、つまり、十三ヶ月ある年を七回作れば、約二二〇年で一日の差にしかならないことがわかつた。

ところで、一月の長さの日数に端数があるのは困るから、二九日（小の月）と三〇日（大の月）に分けた。しかし、大小を交互に置くだけでは月の平均の長さが朔望月より少し短くなり、狂いが生ずる。以上のことから、太陰太陽暦作成の中心問題は、閏月をどの年の何月に置くか、各年のうちに大小の月をどのように配置するかということになる。これには二十四節氣というものが関係する。大雑把に言えば、一年を二四等分した点についた名前で、冬至、夏至、立春などがこれに属する。季節の移り変りを示すもので、これによつて月の大小や閏月の置き方を定める規則を作り、太陽と月の運行の調和をはかつた。さらに、暦学には全く別の次元の大問題があつた。日食・月食の予

測である。現在では単なる天体现象としか思われないが、昔はその原因がわからなかつたから神秘的な畏れを感じた。したがつて、その予測は王朝、ひいては曆作成者にとって非常に重要な問題であった。別の面から言えば、食の予測の当否は誰にでもわかるのだから、曆の良否の最終的チェックの役割りも果たしたのである。

中国的曆学とは、大体こんなことを研究する学問である。中国での歴史は非常に古く、十九年七閏法はB・C五世紀には使われていたし、A・D五世紀には三九一年間に一四四回閏年を置くという方法さえ考えられた。

最も基礎になる朔望月や太陽年の長さについては精密な観測が行なわれたが、造曆には多分に経験科学的な面があつた。中国人は大昔から記録魔的性格を持つており、天文現象についても、日食・月食はもとより、惑星の異常運行などについても膨大な観測記録を残していた。彼等はその理由についての科学的研究は殆ど行なわず、古記録から各種の天文定数や食の周期性を推定し、その上で古記録に合致するような太陽と月の運行を表わす計算式を考え出し、それによつて曆を作り、予測もしていた。つまり、態度としては経験的、手法としては代数的といえる。正史に始めて記載された漢の三統曆(B・C一〇四年)では、

朔望月、太陽年の長さはそれぞれ $29\frac{43}{81}$ 日、 $365\frac{385}{1539}$ 日となつてゐるが、

この数値は観測と古記録合わせの両方から導かれたと思われる。このような方法は、古代中国における計算術の発達、幾何学の欠除という事実に関連するもので、同じように観測を基礎としながらも、幾何学による理論的手法を中心とする西洋天文学とは根本的に性格を異にしていた。

ところで、その時代としては可能な限り精密な観測をしたとしても

限界があり、決定的な理論も存在していなかつたのだから、日月の実際の運行と曆面は、いつかは必ずズレを生ずる。特に日月食の予測の失敗が重なればそれは明らかである。そこでズレを訂正した新しい曆を作り、改めてスタートしなければならない。これを改曆という。しかし、改曆といつても、実際は天文定数を少し変えたり計算式の一部を手直しするくらいしか手段がないから、年を経過すればまた同じことになる、という繰り返しにすぎなかつたのが実状であつた。

日本では、六世紀の持統天皇の頃から江戸中期まで、中国の曆そのまま取り入れていた。昔は中国での改曆をしばしば採用したが、平安時代の九世紀中頃から五代將軍綱吉の時代まで、唐の宣明曆をなんと八百年以上も使つてゐた。これでは曆がずれるのは当然である。そこで、詳しい話は省略するが、貞享元年(一六八四)に安井春海が作った貞享曆が日本人製の曆としては初めて採用され、次いで宝曆四年(一七五四)、宝曆曆に改曆された。しかし、この宝曆曆は改曆直後から評判が悪く、批判が続出した。そこで幕府はまた改曆を考えざるを得なくなり、そのために高橋至時、間重富が大阪から江戸に出府した。イエズス会系曆学と忠敬はここで結びつくのであり、彼の佐原時代は宝曆曆が行なわれていた期間であつた。

以上のことからわかるように、造曆は公権力の仕事で、民間人が直接これに参加することはあり得ない。それでも民間で曆学を学ぶ人がある程度はいた。彼等がそれを学んだのは、高級和算と通ずるものがあつて、高尚な知的ゲームとしてである。実際、曆学者と和算家は重なる場合が多かつた。

忠敬時代の曆学勉強には、ほぼ定まつたルートがあつた。手本は授時曆である。これは中国の元の時代に郭守敬という学者が中心となつて作つた非常に優れた曆で、貞享曆もこれに基いていた。その貞享曆

採用の前後から日本で授時暦研究が盛んになり、多くの入門書や解説書が出版された。造暦は一定のルールに従って行なわれる所以で、計算力のある人なら、これらの本によってルールを覚えさえすれば、特別の発想がなくとも自分の暦が作れる。こうして作った自分の暦と官暦を照合し、合った、外れたと楽しむ。官暦は結果を記載してあるだけで計算の途中経過は書いてないから、特に日食月食が自分の計算どおりにおこつたら非常に嬉しかったろう。こんな具合に、望遠鏡一つなくても暦学を楽しむことは可能であった。江戸時代にはこのような知識的雰囲気が、一部であつたにせよ既に存在していた。忠敬もその一人であったと思われるが、その実態を次に述べよう。

(三)

忠敬の佐原時代の暦学を検討する最初の手掛りは、大谷本に引用されている一通の手紙である(二五頁。紙数の都合上、再掲しない)。現在までの所、これは全く検討されていない。大谷氏も、この手紙は寛政四年一月頃のものと言っているだけで、何の説明もしていない。

これは、当時江戸にいた女婿の盛右衛門に忠敬が佐原から出した手紙で、内容は、何冊かの暦学書の注文依頼、さらに、貞享二年から元禄までの古暦を写しどとくれという依頼が主である。まず、「当時暦学にかかりおり候。」とあるし、また、注文した本の中に『授時暦俗解』という本があることから、暦学を始めてまだ間もないことがわかる。

『古暦便覧』という本が届いたことも知らせ、この本について「貞享元甲子より寛政十四年迄を中節土用月大小日食月食を記し候えども、官暦と引合候えば小差これ有り候」と書いてある。この『古暦便覧』は特定の書物だろうが、この題目の本はかなり出版されていて、暦学書中の一つのジャンルを示すものになっている。いわば、本暦の個人的縮刷版である。つまり、本暦はかなり複雑なので、普通は、忠敬

が書いているように、中節(二十四節氣)、月の大小、日月食など、暦の要点を著者が自分で計算した結果を年ごとに表にしたものである。ただし、古暦という名とは逆に、未来まで計算しているものが多い(現に、寛政は十三年一月に享和と改元されているから、寛政十四年は存在しない)。このように個人的計算によるものだから——前述の暦学爱好者の楽しみ——官暦と小差があつても不思議はない。なお、この時の官暦は宝暦暦だから、どちらが正しいのか。忠敬は、この段階ではまだ同一年についての二つの暦を照合して調べている程度である。古暦写しの依頼も、同じ目的のためであろう。

しかし、彼の学力はかなりの速度で進歩したらしい。それは、藏書中の『授時暦図解』という本に、「此解誤り」「此迂遠也」などの批判的書き込みが多くあることからわかる。

次に、私は藏書整理中に一つの発見をした。これは、今まで誰も気がつかなかつたことであろう。それは『日東通暦』という本についてである。この本自体は古暦便覧の一種で、杉村長郡著、享保十七年刊である。この本の序文(漢文)には、「享保十二年から五〇年分を、初学者の徒の為に私が農耕の合間に計算して表にした」という意味のことが書いてある。ところが忠敬の藏書には元文とか宝暦とかその後の元号があり、安永五年で終っている。元号は前もってきめてあるわけではないから、長郡がおそらくは享保六二年というような形で書いたものを、安永年間以後に誰かが実際の年号を入れて再刊したのであろう。安永五年は実際に享保十二年から五〇年目である(藏書目録には單に「享保十七年刊」とある)。

『日東通暦』をここで取り上げるのは、巻末に、安永六年から寛政六年、つまり、長郡の計算表の終った翌年から忠敬が江戸に出る前年までの十六年分を、長郡とほぼ同じ形式で、閏年、閏月、月の大小、

日月食の日時などを書いた表が、本を綴じなおしてつけ加えられる。この表を発見したからである。この本には「東河書藏」と書いてあるから、これを計算し、表にしたのは忠敬自身に間違いはない。前の段階では他人の作った暦を官暦と照合しただけだったのに、この時点（寛政六年？）では、日月食まで入れた自分の暦を作るまでに進歩しているのである。それによってこの表の内容は、長郡の言うように、暦学としては「初学の徒のため」程度で、高級なものではない。

では、忠敬が暦学を志したのはなぜか。明確な答えは出る筈もないが、まず考えられるのは、前述の暦学愛好者の存在である。江戸との交流が多く、文化的な雰囲気と無縁ではなかった佐原で、宝暦暦批判など暦学の話は忠敬の耳にも入っていたのであろう。実務社会から離れた後の目標を求めていたとき、計算に自信のあった彼がこの話から暦学を考えらんことは十分に考えられる。忠敬が暦学を始めたのが、彼が隠居の意志を明らかにした時期とほぼ一致しているのである。

もう一つ、別の理由の手掛りとなるかも知れない本が彼の蔵書中にある。中根元圭の『皇和通暦』である。これは当時かなり明確に見られた古暦復元の流れの代表的著作の一つで、日本書紀の暦を復元したものである。この流れは、暦学の手法によって昔の暦を復元し、それと史書に記載された暦日を比較して日本歴史を研究する一助にしようというもので、現在から見ればナンセンスにも思えるが、当時は真剣に研究された。この本を忠敬が持っていたこと、忠敬が若い頃はむしろ文系学問に興味があったということ、特に楫取魚彦（本名伊能景良、忠敬より二〇才年上の伊能茂左衛門家の主人で、賀茂真渕の高弟。新記念館敷地がその屋敷跡）の存在などを合わせると、忠敬が古暦復元を目指して暦学を始めたということも考えられる。しかし、現段階では私はまだ調査不十分だから、これ以上の発言は控えておく。

現在までの所、私が直接にあたった資料は以上すべてである。これ以外にもある、又はあつたかも知れないが、江戸に出る前年までにあの程度では、驚く程高度なことはやっていなかつたであろう。結局、佐原時代の忠敬の暦学はすべて伝統の枠内で、しかも高度のものではない、イエズス会系暦学も知らない、後の測量に結びつくような徵候は何もない、と結論してもよいと思われる。

忠敬は暦学の勉強を続けるために江戸に出たのだが、その暦学の目的ははつきりしない。ある人は俳諧を、ある人は閒碁をえらんだ、といふのと同じレベルで、隠居後の楽しみとして暦学をえらんだ可能性もある。ただ言えるのは、江戸に出た時の知識から見て、初めから全国測量を目指していたとは思われない、ということである。先にちょっと触れたように、彼の測量法の根幹はイエズス会系暦算書にある。彼はまだ全くそれを知らない。田舎名主が身につけていた町見術くらいで全国測量を企てていたなど、とても考えられないからである。

そうなると、忠敬が高橋至時に入学しなければならない必然性はなかつたのではないかという疑問が生ずる。今までは、忠敬は始めから至時を目指して入門したと言われていて、二人の江戸入りの時期がほぼ一致していること、田舎者の中敬がいきなり至時に入学できたことの二つが疑問とされている。しかし、上述のことから、忠敬は（伝統的暦学者も含めて）良い先生なら誰でもよかつたのだが、たまたま江戸に来たばかりでまだ弟子のいない至時だから入門できた、という大胆な仮説も成立し得るだろう。忠敬のその後の活躍が至時の存在によることが極めて大きいだけに、運命的とすら言えるこの出会いのプロセスの解明は、今なお残る大きな課題である。

伊能忠敬の「測量日記」に見る

五島の歴史と風土　的野　圭志

伊能忠敬の五島列島測量は文化十年、忠敬六八歳の時であった。対馬の測量を終わり、南下して五月二三日列島北端の宇久島に始まり、七月末日南端の福江島を終わるまでの約二ヶ月間の測量であった。僅か二ヶ月間の五島測量で、十七年間にわたる日本測量の全体を推し量ることはできないにしても、この島に住み、その地勢などを知っている我々には「一日にこれだけの距離を、こんな難所を」と「測量日記」や、忠敬、坂部貞兵衛の五島からの書簡を通して知ることができる。その苦労と努力にはただただ頭の下る思いで「大日本沿海実測全図」の完成は実に偉業と言うほかに言葉が無い。

五島列島の測量は全國測量のなかでも難所の一つではなかつたろうか。地形は北西に陥没した「沈降性傾動地盤」で海岸線は多くの溺れ谷を形成して複雑。大小約一四〇の島々は、北東から南西に九〇キロにわたって繋がる。更に九州本土から西方に百キロ、東シナ海の只中に在り海は荒れる。地図で五島列島を見ると小さな島々の集まりで大した測量でもなかつたろうと思われるが、とんでもない、空からでも見ないことには海上からはその島の形も、大きさも、全く見当もつかない。大へんな測量だつたと思う。

それに五島列島すべてが五島藩の領地ではなかつた。平戸領、平戸と五島の二方領（年貢や諸収入を折半）三方領（五島四分の三、平戸四分の一）それに五島藩から分知した旗本富江領（〇カ村の人込みが

あった。陸の境界は海上の境界にもつながり漁業権に關係していく。魚類豊富な五島では、これは死活にかかる大問題である。

中通島の有川湾は北が魚目村で富江領、南の有川村は福江領である。有川湾は鯨、鮪、鰐など五島屈指の好漁場である。明暦元年、十一歳で五島藩主となつた盛勝の後見役を辞した叔父盛清が、本藩の一万五千五三〇石のうち三千石をもつて富江に分知し旗本となつて以来、有川湾は福江、富江両領の論争の場となり、貞享元年には両領が幕府評定所に上訴した事件もあつた。五島測量の文化年間は、富江の領主五島運龍^{ヨウラク}は幕府の大番頭、ついで側衆の役にあつた。

五島測量は列島の東側を伊能忠敬ら五名、西側を坂部貞兵衛を隊長とした五名が測量する。北端宇久島は富江領三カ村の入込みの福江領、ついで小値賀島は平戸領、ここで二隊に別れて本隊は六月十日五島第二の大きな島、中通島に入る。北端は平戸領、続く魚目村は富江領、有川村から島の南端までは福江領である。六日間で中通島東岸を終了し、六月十六日に富江領桺島に渡る。「西南大風波高く、桺島裏手測量できず。見合のところ終日大風、殊に絶壁につき不測逗留」翌日も「桺島裏手は波高にて測量ならず」と中通島とは一変した地形に離没する。更に「津婦羅島（桺島属島）を測る。この島福江領、富江領論島故測量むつかしくに付：」と領海問題にも気を使う。「手伝人足や小船、諸器持ち人足だけで村役人は出て来なくてもよし。案内人を双方から一人づつ出すだけでよろしい」と対策を日記に書いている。

桺島を終わり二〇日奈留島に渡る。此の島の地形は桺島より複雑である。「此より大絶壁、西風波高く殊に風を受けて船測成り難し。半時ばかり見合、風雨つなり打止」「此より絶壁波高船測成らず」絶壁に加えて蛸の足のように出入りの入り江、又天氣も悪かった。「二十一

日 朝より曇雨、暮より大雨」「二十一日 昨夜より大雨、午前に止む。此日土曜入、昼後小雨。七ツ頃より大雨」「二十三日 朝大曇、半途より大雨、午後に止む。又雨」「二十四日 朝より終日曇天」「二十五日 朝小雨、五ツ前大雨、四ツ半頃止み又雨。六つ後出立、大雨にて引取り、又九ツ前出船」「二十六日 大曇又小雨」と初日から測量が終わるまで連日雨に祟られた奈留島測量であった。

ところで手分けの坂部隊はどうなっていたのだろうか。本隊は中通島東岸から梶島、奈留島と直線距離にして約七〇キロの測量を十六日間で終了しているのに、坂部隊は中通島西岸と若松島、日の島と直線距離にして四〇キロの測量に実に二九日を要している。日数からみても如何に困難な測量であったかがわかる。中通島は北端平戸領津和崎村に始まり、続いて魚目七カ村、続く青方七カ村が富江領、浜之浦村一帯が平戸領、福江領若松島から瀬戸を隔てた中通島西岸は北の今里村、荒川村が五島、平戸二方領、続いて宿の浦村、佐尾村と南端まで三方領である。「両領入込の場、殊に論地なり」と測量日記にあるように、中通島西岸は富江領、平戸領、二方領、三方領と連続した入込の場であり、若松瀬戸という海岸線も列島中最も複雑を極めている。

坂部隊が若松島に入ったのは六月十二日、対岸の二方領、三方領と瀬戸一帯の測量に二週間もかかり、貞兵衛が発病した日の島には二〇日午後渡り、二二日から二七日までの逗留測りとなる。

日の島は歴史の島である。朝鮮の成宗二年(一四七二)に選修された『海東諸国記』に、当時朝鮮に遣使していた五島の五人の豪族の人として「五島日島大守藤原朝臣盛」の名が書かれている。現在この島の海辺には宝篋印塔を含む中世期と見られる墓石群があり、列島の裏側に隠れたこの小さな島は密かに朝鮮、中国の沿岸を窺う最適の地

として謎を秘めている。旧藩時代には代官所も置かれていた。

この若松島、日の島での苦難の測量は、その時奈留測量中の忠敬宛に測量の打合せなどを書き送った貞兵衛の七通の書簡——その中には彼の死去十八日前の最後の書簡も含まれている——が生々しくその実体を伝えている。本誌「伊能忠敬研究」第八号(第十二号)に安藤由紀子さんが「伊能家文書紹介」として書いておられるので一読していただきたい。

「私足痛をこらへ、三之助、清助不承々々をだましまし相廻り候次第、私も最早難所之巖石等飛渡りも出来兼、老込ミ候得共、余義無く小手分いたし、相廻り候」「私義も先日無利測以来、草臥強く旦風氣に候ハバ今晚は熱氣頭痛有之」と、真夏の連日の困難な測量で貞兵衛の疲労困ぱいは極限にあつたのではないだろうか。それに三ヶ月前の四月に母親を亡くし、その悲しみ、落胆も発病——腸チフスだったらしいの原因の一つでもあったのだろう。「薬は飲んでいるが医者を信していいせいか一向にききめがない。宿舎は大家だが古家で雨が漏って寝るところもない」江戸を遠く離れた最果ての五島列島、その又離島で貞兵衛どんなにか心細く淋しかったことだろう。

奈留島測量を終わった本隊と若松島一帯の測量を終えた支隊は久賀島で合流し、久賀島を三日で終つて六月二九日両手共福江に入る。福江島は南半分を伊能隊が、北半分を今泉隊が測量する。

二日、町会所を出発し、海堀を渡つて城代家老屋敷から大手内脇に出る。五島の古文書に「今朝浜手測量に付、盛繁見物のため罷出、伊能勘解由対面に及ぶ」とある。殿様も大手門まで出て測量を見学したのである。福江島はさして難所もなく測量は順調に進んでいく。

ところで、この「測量日記」で特に島に住む我々の興味を引くのは一八三年前の五島の歴史の一面が書かれていることである。富江領柵島の測量日記に「芦の浦、右阿波國より出張の網納屋十五軒」とあり、奈良尾村では「紀州より出張鯿納屋八軒」青方村でも「大曾この所に鮪鯿の納屋あり。紀州より出張して漁すという」とあり、この他にも「鮪納屋十四五軒」といった記述が各所にみられる。これは近世始め頃から、紀州、関西、四国の漁師たちが季節的に五島に出漁し、漁期が終わると又故郷に帰っていたのが、段々と五島に居付くようになり、奈良尾、佐尾、若松などの漁村が形成され、五島の漁業の基礎が築かれていく過程を物語るものである。

福江島東南の離れ小島、赤島と黄島の測量で「赤島人家八十九軒」と書かれている。三百人近い人が住んでいたのだろう。水も無い火山島のこの島の人口は七人だけである。隣の黄島には旧藩時代は鯨納屋もあり、綱元の屋敷跡には今も見事な切石の石垣が残っている。江戸時代この一帯がいかに豊漁の海であったかがわかる。

福江島西北端三井楽柏の沖の姫島の記述も興味深い。「岐宿村属姫島を測る。海岸大絶壁、西風強く船測出来ず。通行ならず雜木の中を切り分けて行く。右山形に新畠二町ばかり薩摩芋、大村身縫人の家七軒あり」身縫人とはどんな意味なのかわからないが、大村とあるので大村領から移住して来た隠れキリスト教だと思う。五島にキリスト教が布教されたのは、ザビエルが日本に布教に来て十七年めの永禄九年（一五六六）であった。領主純堯^{スニヤウ}は洗礼を受け、当時の五島の信者は二千人とも言われている。しかし江戸時代になり禁教令で五島キリシタン史は断絶する。寛政九年（一七九七）藩主盛運は大村藩主に領内の百姓の五島移住を要請する。五島と向き合った九州西岸の外海地方から「五島へ五島へと皆行きたがる。五島やさしや土地までも」と外

海の俗謡に唄われているように、二千人余の隠れキリストンの百姓たちが信仰の自由を求めて五島の僻地に四軒、五軒と移住し、信仰の灯をともし続け五島キリストン史が復活する。彼らはこのような船を付ける入江も無い、絶壁に囲まれたような小さな島にも移住し、薩摩芋を主食にし信仰に生きていたのである。姫島には昭和三〇年頃まではカトリックの教会もあったが、三十年代終りに無人島になった。

福江市郊外に南河原^{ナガワラ}という山の嶺線近くの一本道に人家がへばり付いている集落がある。その海岸近くに墓跡があり「昔疱瘡小屋がありその死人の墓だ」と言い伝えられている。測量日記に「南河原崎左三十間ばかり上段に疱瘡小屋一軒、領主より普請なり。此節大村引越疱瘡五人あり」と書かれているが、大村引越とはこれも外海からのキリストン百姓であろう。この地区は最近まで、明治六年禁教令がとかれてもなお潜伏し続ける「隠れキリストン」の地区と言われていた。

この外にも「大宝寺九州にては西の高野と号すと福江領にていう」「高浜浦蛤名物」など最近のこととばかり思っていたのが百八十三年昔にも言われていたとは驚きで、こんな興味ある事が随所にみられる。

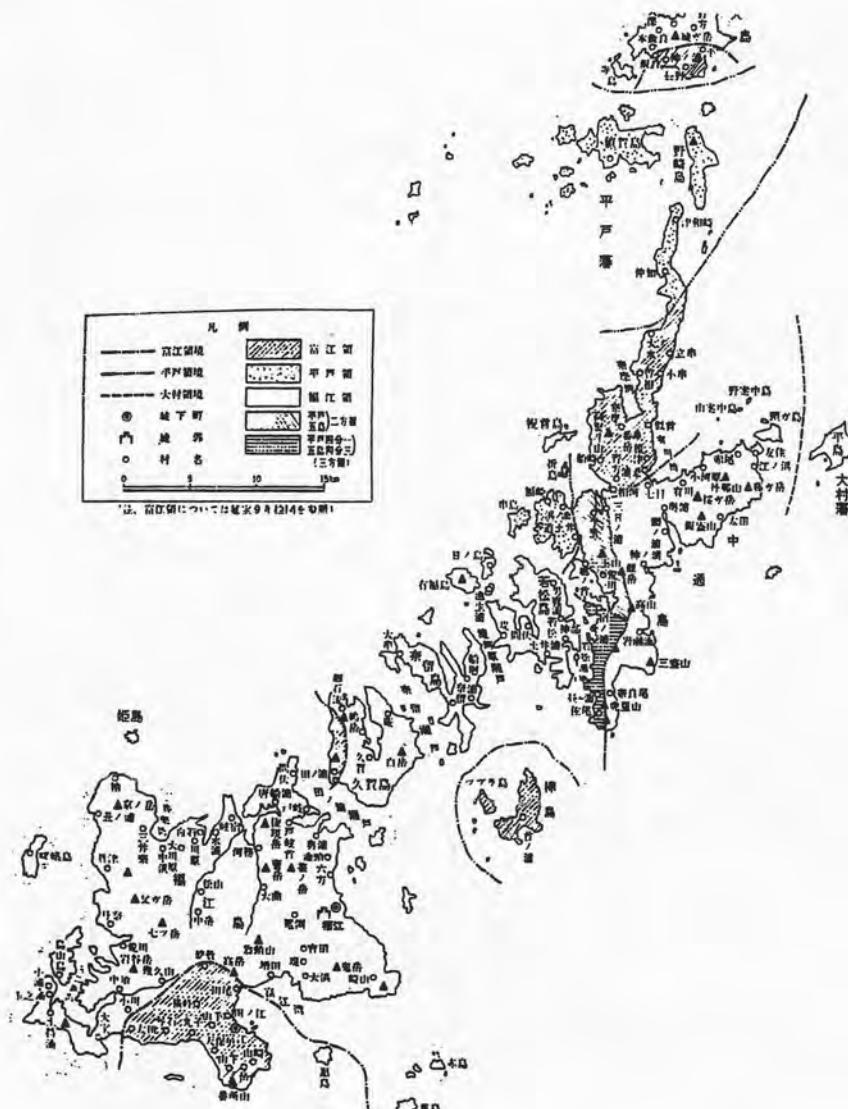
苦難の五島測量も七月二九日福江城下の市中測りを以て全測量を終了した。五島侯からは一同に土産として五島産の品物、夜は料理、酒がおくれ、家老又野監物が対談に來訪、忠敬からは五島侯に万国地図一幅が贈られた。三〇日一行は藩主の御座船五社丸に乗船、町奉行代官らに見送られて次の測量地西彼半島へと福江をあとにした。

最後に坂部貞兵衛の死について述べておこう。日の島で発病した貞兵衛は、福江に移送されて療養していたがはかばかしくなく、遂に危篤状態になった。知らせを受けた忠敬は七月十四日朝測量地荒川村を

出立し、六里の道を急ぎ屋頃福江に着いた。支隊の今泉又兵衛も三井楽から駆け付けた。貞兵衛の意識はまだあったのだろうか。翌十五日貞兵衛は忠敬、又兵衛に看とられて午後三時、四三歳の生涯を閉じた。翌十六日両手の隊員は福江に集まり午後四時宗念時で葬式がとり行われ、世話をしていた貞方家の墓地に葬られた。この日は雨であった。

翌日も、又次の日も貞兵衛の死を悼むかのように雨が降り続き、十九日になってようやく雨はあがった。五島藩は「遊興鳴物三日停止」の命を出して哀悼の意を表した。貞方家では一族の墓碑と同様香華を手向けて供養を怠らなかつたという。

(五島文化協会副会長)



伊能家文書紹介七 その一

お信さん（つづき）

安藤 由紀子

も分かる。

史料二 一三八 伊能忠敬書簡

（江戸店）盛右衛門（婿）・お稲宛
寛政六年七月三日

前掲書

「桑原大先生の御療治」

前号の書簡のあと忠敬は、続けて二通の容体伺いの手紙を書いた。

史料一 一四五 伊能忠敬書簡 千葉県史料・近世篇

（江戸店）盛右衛門（婿）・お稲（長女）宛

寛政六年七月十八日

（前略）お信の病状はその後いかがでしょうか。私が江戸を出てから

は暑熱も少し薄らいだので、よい影響があるのでないでしょうか。

別れたときは、咳と痰と腰痛に苦しんでいましたが、涼しくなって全快するよう願っています。私は佐原の方が、性に合っています。店卸しも途中で、土用干しも盆前から座敷いっぱいに並べられ、方々に散らばっていましたから、店卸しも始末し、諸道具も藏へ納めさせました。

（中略）桑原養治様からお預かりした磁石の箱入り、机の上に置いて来てしまったので、佐原へお下しください。もしお返してしまったのなら、養治様に御願いして取り寄せ、ついでの便で送ってください。（後略）

史料三 一四七 伊能忠敬書簡

（江戸店滞在）伊能直右衛門（長男景敬）宛
寛政六年八月二〇日

前掲書

お信さん自筆の手紙を受け取つて忠敬さんは幸せである。また、桑原家から借りた磁石のほかに、自分の磁石も誂えている。
さてこの同じ時期、体の弱い長男の直右衛門（景敬）も江戸へ滞在し、桑原隆朝の治療を受けている。忠敬がいかに桑原隆朝を信頼していたか。次の資料を見ていただきたい。

（前略）桑原養治は、古今未會有、和漢の医書にも無く、一度と受けられないほどのものです。よくお考えになりその力を信じ、

（前略）お信も私の出立後、酷暑退き涼しくなったので、容体も良くなり自筆の手紙が来ました。嬉しくなりません。もう大暑もないでしあから、だんだん良くなるよう祈っています。（中略）七分の磁石、日本橋三丁目玉屋へ預けて置きましたので、文右衛門から受け取つて佐原へお下すこと、伊勢町（第一伊能江戸店）へ頼みました。あなたのお店へも、養治様から預かった箱入り磁石お下しのこと頼みます。（後略）

日数かまわぬお通いなさい。あなたの体は私がみても骨組みよろしからぬ、先生もお直しにお困りと思います。（中略）店へ往診していただいた上に、またまた毎晩でも一晩置きでも、気軽に伺って大先生の御伝授も受け、その上養治様の御按摩もお願ひしなくては、八、九分通りにも直すことは出来ません。右のことお稲、盛右衛門へ話し、私のいった通りにしなさい。子を愛する所ここにあり。親の有難きこと、よくよくお考えください。（後略）

佐原に独りぼっちの忠敬はさびしい。「子を愛する所ここにあり」などと筆を走らせている場面を想像すると、普通の人だなあと、親しみを感じてしまう。

「羽織りがない」

心の寒い忠敬さんに冷たい風が吹き始めた。それなのに、羽織りがない。多分お信さんがどこかにきちんとしまい込んで行ったのだろう。

史料 四

一四〇 伊能忠敬書簡

（江戸店） 前掲書
お稲宛

寛政六年九月二十八日

お信の病氣、特に腰痛は、近頃どんな様子でしょうか。長い病いでさぞ退屈していることでしょう。手紙も出したいとは思うのですが、返事を書こうと気を使うでしょうし、私も病氣なので、別紙は書きません。宜しく伝言頼みます。

直右衛門（景敬）ながなが厄介になり、お世話をこととお察します。もう寒くなり、先生の御療治も二人一緒では行き届かないでしょから、大工町の御都合よろしければ、直右衛門は御帰しくださるよう申上げてみてください。自分自身で心掛けることをよくよく御申し含めくださった上で……。

（前略）私の持病もだんだんよくなり、九分通り治りましたが、例の「あと病み」でまだ髪もそらす納戸に引き籠もっています。一両日中には髪もそるつもりですから、御心配はいりません。それで病後、朝夕寒くなってきたので、普段着の綿入れと羽織りを方々探させましたが、羽織りは一枚も見付かりません。ようやく春に着古した紬嶋の綿

忠敬は体の頑丈な人ではない。書簡には病氣の記述が度々現れる。これでよく、この六年後から十四年間、七〇才まで、日本全国を歩き回れたものだと思う。彼は今じめで、パニックに陥っている。略しが、繰り返し「着るものがない」と訴えている。多分お信さんのしまい場所が分からなかつたにちがいない。その証拠に彼女は、とても忠敬さんをほつておけないと思つたらしく、翌月佐原に帰ると言つ出

した。そして帰って、これが彼女の「最後の佐原」となった。

おいのちゃん

次の資料は長いものだが、全文引用したい。文中「地頭所の御差紙」とは、村で興行する芝居の運上金の件で、いつも手元不如意の領主から村役人に出頭命令（多分増額要求のため）が出たことをさす。

史料五 一四九 伊能忠敬書簡

（江戸店）お稲宛 前掲書

寛政六年閏十一月四日

一筆申し述べます。寒氣もいよいよ強くなつてきましたが、片貝から無事に御帰府のことと思ひます。（お稲は姑重病のため片貝へ出向いていた）さてお留守中、大工町先生（桑原隆朝）の御内意とのことで、中宿（伊能店の帳簿調べのため出府中の、親族伊能平右衛門）より書状が参り、「お信、出府させて治療させるように」とのおことづてでしたので、その旨お信に申し聞かせましたところ、「もう四、五

日様子をみてその上で決めたい」と申しますので、その意志に任せておりました。すると加納屋新兵衛（伊能第二江戸店経営者）からまた先生の御内意を伝えてきて、お袋さまからお信宛ての手紙も添えてあり、「もし出府しないと、この寒前後に症状急変のこともありますし、中村松敬の治療も受けたほうがよい」とのことでした。

そこで二日朝迎えの駕籠と、八幡まで迎えの人を出してくれるよう頼みました。良い天気だったので、定めし迎えの駕籠と迎えの人を出してくださったことと思ひます。

かねがねご存じの通り、病気が全快しないうちは、こちらへ呼び寄せるつもりは毛頭なく、春、夏までかかつてもかまわないから、治療をお願いしたいのが本心でした。しかしお信も江戸に長逗留になることに十一月には婚礼もあること、（佐原へ帰つた方が）養生になると思ひましたし、先生も佐原で服薬していくても同じ事と思われて、こちらへ帰されたわけです。先月中旬、下旬の容体をお信から報告しましたので、御安心なされず、寒まえに出府させるよう言つて寄越されたのでしょう。こちらへ帰つた当座はさほどの事もなく、声が出せないのと、痩せやつれと、日に一、二度の癪の痛みがあるくらいでした。これは、我が家が珍しく、氣も晴れたせいだと思います。先月より癪氣も昼夜に二、三度になり、癪氣の起こらぬ時は手足の筋をつめる様子で、この頃寒さが強まって、いっそう具合が悪そうです。こちらへ帰つた頃は、水風呂も七、八日に一度は入つていたのですが、先月中旬からは一切入らぬよう用心しています。

夏中より大病と分かり、毎日心配していました。先々月佐原へ帰つたと言つてきた時も、そんなことは止めたほうがよいと諭しました。でもどうしても帰ることなので、いったんは嬉しく思いました。しかし帰つてからも、格別快方に向かう様子もなく、下女たちは大の「猿松ども」ばかり。平生不自由な思いをさせがちでした。私が村の用事で外出してしまつと、側に付き添つて話ををしてやる人もあります。癪のいたみに床の上で苦しんでいるのを見て、共に心を痛めました。今の容体は、帰つてきただ頃より悪化しているように思います。今度江戸へ行かせるのも、寒中良くないこととは思いますが、この辺には良い医者もなく、大工町の御指図に任せて出向かせました。寒中の旅で少し悪くなるかも知れません。

なまじ佐原へ帰らせて、一つも得にならず、損をしてしまったよう

で、今度の出府には特別心を痛めています。どうかお察しください。大工町先生のお陰により、春中、夏中までにも全快するよう祈っています。

この上は何かと不自由のないよう、心配してやってください。

おいの引取りのことは、お信から御相談するはずですから、追々お掛け合いに及ぶつもりです。かしこ

閏四日夜（寛政六年閏十一月）

東河

お稲殿

なお直右衛門（長男景敬）、御地頭所お差紙に付き、お信の送りを兼ね出府させました。これまた御厄介をかけることと思ひます。夜中に認めましたので、寒さに水鼻を流し、墨も薄くなつてしましました。あれこれの心労お察しください。

十月に帰ったお信さんは、十一月いっぱい佐原にいただけで、閏十

一月の二日、江戸へ去って、再び戻ることはなかつた。

「自分は呼び寄せるつもりはなかつたのに、お信から言い出したのだし、桑原先生も帰佐を許したではないか」と少し言い訳がましく、綿々と心配と悲しみを訴えた、なまなましい手紙である。

ところで、本文最後の二行はどう解釈したらいいのだろうか。

お信さんには「おいのちゃん」という女の子がいたのだ、と考えるのが妥当ではないかと私は思う。当時、五、六才で初婚という方がおかしいのかも知れない。御主人に死なれたか、離縁になつたのだろうか。この子は桑原家が預かっていて、死を悟ったお信さんが、手元に

下総の四六才の名主と、仙台という大藩の上級藩医の娘（子持ちではあるが、まだ若い女性）とを結び付けたきっかけは、何だったのでしょうか。

佐原と仙台

科学史家今野武雄氏が、一九七七年、新日本新書の一冊に『伊能忠敬』という本を書いている。小島一仁氏が、その著『伊能忠敬』の「読者のための参考書」で言及しておられる通り、事実関係では不正確な記述が大変目立つが、「偉人伝ではなく、忠敬のエネルギーの源泉を追求しようとした」ため、ユニークな発想が所々に見受けられる。書中、今野氏が「仙台と佐原」の接点にこだわっておられる点などがその例である。その部分を抜粋して、まとめてみた。

一、仙台藩の経世家（有名な発禁本『海国兵談』を書いた）林子平の父、林笠翁^{リョウカツオ}は、御書物奉行まで勤めた幕府の直参だったのに、傷害事件を起こして浪人となり、十二年間流浪の生活を送つた。

一方そのころ佐原には、忠敬家の川向こうに同族伊能茂左衛門家があり、後に隠居して江戸に出て楫取魚彦^{カトリナヒコ}と名乗り、賀茂真淵門下四天王の一人に数えられることになる歌人、国学者が当主であった。林笠翁はある時期この家に寄食していた。そしてその子林子平が最も信頼していた仙台藩医で、『海国兵談』の序文も書いた工藤平助の妻の姪が伊能忠敬の後妻「お信」である。

引き取りたいと忠敬さんにせがんでいたとしたら哀れである。「自分もあとかう掛け合うつもりだ」と書いてこの手紙は結ばれていて、忠敬の誠意が伝わって来る。

一、当時仙台藩の米は銚子経由で利根川を溯って江戸に送られ、潮来に藩の米蔵があつた。一方山片蟠桃というペソネームで、有名な『夢の代』を書き、合理的世界觀を展開してみせた大阪人の商人思想家がいた。彼は豪商升屋の番頭として取引きを拡大させ、忠敬の師高橋至時、間重富らと共に麻田剛立の門人で友人でもあった。仙台藩は彼の商人としての手腕をかつて、当時破産状態だった藩の財政立て直しを依頼していた。この高名な商人のことを、忠敬が知らないはずはない。

二、安永七年五月から一ヶ月ほどかけて、伊能忠敬は最初の妻「みち」と共に奥州旅行に出かけた。その頃から伊能家と仙台藩との間に何からかの関係があつたかもしれない。仙台藩は財政破綻に苦しみ、大坂の豪商升屋から借錢してやりくりしていたのだから、佐原が仙台藩の貿易基地であつたことを考えあわせると、佐原の商人と何がしかの関係があつても不思議ではない。

私は三点とも丁寧に当たつてみたのだが、飛躍が多く、今一つ「伊能忠敬と桑原信さんとの結婚」の説明としてはしつくりないのである。スペースの関係で本稿では簡単に述べてみよう。

第一点。林笠翁と楫取魚彦に関係があつた事は確かである。笠翁の著「仙臺間語」をみると、俗語に古語が残っている例を集めておいた草稿「鄙言雜俎」を、青藍（佐原時代の魚彦の俳号）に見せたら、自分が編集したいからいただきたいと乞われたので与えたと述べている。しかし、笠翁が流浪生活をはじめた時、その子林子平は三才で、笠翁の弟従吾の養子になっていたし、伊能茂左衛門（後の魚彦）は十八才、流浪生活のどの時点からは分からぬが、元直參の浪人学者と二十代の

名主当主の出会いである。

やがて子平の姉「なほ」が、仙台藩主伊達宗村の側室になったという偶然から、兄ともども仙台藩にかかえられ、子平兄弟は仙台に移り住んだ。子平十九才のことである。流浪の元旗本、林笠翁を原点として、仙台側の人脈から、仙台藩士林子平→その師工藤平助→その義弟桑原隆朝→その長女お信さんとつなげ、佐原側の人脈から、伊能茂左衛門（楫取魚彦）→伊能忠敬とつなげて二人を出会わせるのは相当に無理がある。伊能忠敬が婿入りして三年目に茂左衛門は魚彦を名乗つて江戸に隠居してしまったことだし。

第二点。これが事実だったとしても、伊能忠敬と高橋至時・間重富を結び付ける説明にしか利用できない。

第三点。伊能忠敬の「奥州紀行」は、名所旧跡、地名、距離、諸費用等の記録で、仙台で重要人物に出会つた形跡は認められない。結局のところ「縁結びの真実」は、まだ分からぬ。しかし、またいつもの仮説で申し訳ないのだが、案外単純に考えて、最初から伊能家が、桑原隆朝の患者だったというだけの事かもしれない。状況証拠はいくつかある。

（この項つづく）

参考文献

- ※ 『伊能忠敬書状』 「千葉県史料」近世篇
一四五・一二八・一四七・一四〇・一四九
- ※ 今野武雄 『伊能忠敬』 「新日本新書」
- ※ 小島一仁 『伊能忠敬』 三省堂書店
- ※ 林笠翁 「仙臺間語」 『仙台叢書』別集一「儀式考付録」
- ※ 伊能忠敬 『奥州紀行』 『伊能忠敬書状』付録

名乗書

伊能 阳子

「チュウケイ先生」 わが家では親しみをこめて「忠敬」をそう呼ぶ。佐原の人々も、そう呼ぶことが多い。

「タダタカ」と「チュウケイ」と、どちらが正しいのですかと聞かれたことがあったが、勿論、正しくは「タダタカ」である。

昔の人は、よく名を変えたようで、一人で幾つもの名を持つことは不思議ではないが、これほど沢山の呼び名を持っていた人は少ないと思う。子供の時の三治郎（或いは三次郎）、佐忠太から始まり、諱は詮興であり、伊能家に迎えられるとき忠敬と改め、通称は源六、三郎右衛門、隠居してからは勘解由である。また、雅称として子齋、東河、或いは楽天樓主人と名乗っている（伊能家氏族譜による）。

なんと、両手の指の数ほどもあるではないか。この中で、源六と三郎右衛門は、伊能家代々の当主の呼称であり、勘解由は、これも当主隠居後の名前である。したがって、この三つの名前は、どの時代にも登場し、私たちを悩ませるのである。当主三郎右衛門の父も三郎右衛門であり、祖父も三郎右衛門さんであったわけである。

忠敬の場合、十ほどもある名前のうち、子供時代のは親や周囲の人からの呼び名であろうし、源六、三郎右衛門、勘解由は伊能家代々先祖が名乗って来た名である。自らの意志で称したのは、子齋、東河、樂天樓だが、手紙の署名に「樂天樓主人」とあるのを見て、生真面目なイメージの忠敬が？と思つたが、天（文）を楽しむことから始まった壮大な夢を、追い続けた彼のシャレ心であろうか。また「東河」と高橋至時の号「東岡」とは関わりなく、全くの偶然のようである。

実名となつた「忠敬」は、宝暦十二年忠敬がいつたん養子となつた平山季忠の第四子として、林大学頭の門人となり撰名を請い、命名されたものである。佐原の記念館に、「名乗書」が保存されているが、さらに、林大学頭の塾入門者の控え「升堂記」に

林大学頭詩文（左頁下段）



「宝曆十二年壬午 十一月五日入門」

父藤左衛門口入

平山左忠次

改伊能三郎右衛門

不弟勿怠勿忘所期在茲所
寶曆壬午仲冬佳辰 祝在茲

國子祭酒林子恭父考

とあるのを見たときは、当然のことなのに驚き、嬉しかった。資料を

ご教示くださった、池上先生（世田谷郷土資料館）に感謝々々である。

また、旌門金鏡類録（伊能家に伝わる記録）を改めてみると、次のように書き残されている。

「同十二年午年十一月 貞恒ノ男某 平山季忠

平山秀曉ノ嫡子也
称藤右衛門

ニ介メ 御先代鳳谷公へ入門シ 実名忠敬ト賜ハル」

これで納得と行きたいところだが、平山左忠太と左忠次の違いが気になつた。单なる写し違いか、あるいは平山家に対する配慮か、不明である。

印 印

林大学頭鳳谷（信言）によるこの詩文及び名乗書は、一當時最も尊

重せられたるもの……と、大谷亮吉著『伊能忠敬』に書かれているが、どういう訳か詩文の方は、世田谷の文書の中にあつた。

史料 二 A五四 林大学頭詩文

（世田谷伊能家文書）

松風亭

門人平山季忠四子

忠敬入余門因與

可稱升堂志負笈

慕儒風努力聖賢

業豈忘蠻雪功

祭酒林子恭父

論語衛靈公篇子曰言忠信
行篤敬雖贊貶之邦行矣於

戲聖言可鑒可誠能守此言
能如此言則何往不孝何住

印 印

忠敬 歸納訂

史料 一

八一 伊能忠敬名乗

（伊能忠敬記念館）

名乗 従五位下守林大学頭

伊能三郎右衛門殿

忠敬 歸納訂

史料三

A.五三

(世田谷伊能家文書)

萬□文章
与門人伊能忠敬詩并序

「忠敬」の名を与えたのは、林家五世の鳳谷（信言）である。彼は宝暦七年に家督を継いで大学頭になり当時三六才。この後、六世鳳潭、七世錦峰、八世述斎まで、伊能家はかかわりをもっていた。忠敬の孫、忠誨もまた林家からその名を請けている。忠誨の文政三年の日記によると

家君門人総中村人平山秀忠遺第四子忠敬爲

伊能氏家督云伊能氏養爲子則与所生無異也

夫父子之道天性也爲人子正於孝爲人父止於慈

如比而後家道以正堂構日昌焉且養之與所生

無異則所生何擇焉按豊後人緒方惟義後分族

伊能氏舊史所稱緒方氏母逢水蒼衣偉人而有孕

已生男長容貌魁梧武力過人名大太時人以爲

龍子也是故九州莫不知有緒方氏在而相傳爲

豪族也尔来年紀已久遠矣未詳言説也雖然

今季忠來告以故事且請余詩續飾而將傳之

家矣豈不亦好事哉然而其好尚文雅不可默

聊賦以應干其需

長風一夜滿燕臺無怪名駒千里才

舊聽渥佳龍種色翻々新捲五花來

経筵講官林敬題

林大學頭から名を戴くのは大変なことで、それなりの手続き、形式、勿論お金が必要だったであろう。特に着替えて、緊張した忠誨、いや三治郎——これまた忠敬の幼名と同じである——の様子が、想像できる。

日記にあるように、忠誨は入門は許されていないので、升堂記には名前はない。「忠誨」の実名を戴いただけであった。

印 印

資料紹介を始めます

編集部

忠敬のことを調べたい方のために資料の頁をつくることにしました。事務局に集まつてくる古文書の史料の中には、発表するスペースがないためそのままになるものもあって、勿体ないのでこれらの利用の途を開く目的があります。

資料といつても、古文書の原文のままのもの、古文書を解説したものの、刊行されたもの、雑誌などへの発表、公刊されたものであってもこれまで知られていなかつたものなど様々です。また経費もかかりますし、著作権の扱いにも注意が必要です。これらもろもろの問題について一定の整理をした上で紹介の方法をきめました。

一、対象とする資料

事務局に所有または寄託されている忠敬についてのすべての史料（地図を含む）で、本欄で紹介したもの。

二、利用方法

会員からの申込みに限り、資料の複写を提供するものとし、事務局の手数料を含み一枚三〇円の実費を負担願います。資料枚数は紹介記事に明記しますので合計額を郵便振替で送金して下さい。通信欄に資料名をハッキリ書いて下さい。他の送金手段は事務局の手数が増えますので御遠慮下さい。

三、原史料、解説史料は所蔵者、解説者名を記しています。著作物などに利用する場合は必ず所蔵者、解説者の了解をおとり下さい。本会の史料公開はあくまで、会員の自己研究のための公開であることを御承知下さい。著作権、所有権にかかわる事項は利用者の責任で処理す

る必要があります。

四、活字資料については、通常の方法では入手の難かしいものを対象とします。単行本は内容紹介にとどめ、複写提供をしません。図書館を御利用下さい。

五、会員各位がお持つの、これはと思われる資料を提供又は寄託して下さい。本欄に掲載し周知いたします。資料提供をされた方には、他の資料入手について便宜をはかりたいと考えます。

だいたい、以上のような考え方で「参考資料の頁」をはじめることとします。もし不都合があればその都度修正してゆきます。今年から忠敬再発見が本格的にスタートします。資料も色々出てくるのではないかと期待しています。

とはいっても、いきなり古文書を並べるのもどうかと思います。まず基本的資料についてまとめておきます。

●大谷亮吉『伊能忠敬』岩波書店、大正六年

明治中期に伊能忠敬が偉人とされ、顕彰の動きがおこり、帝国学士院（現在は日本学士院）の事業として、明治末年から約十年をかけてまとめられた大著である。監修は長岡半太郎、著者大谷亮吉。六〇〇頁で、忠敬の生い立ちから、隠居、日本測量時代、測器と測量法、製作された地図、師友、測量隊員まで觸れており、忠敬伝の決定版として古典的な存在である。

本書の編述は、三井財閥からの貳千円の寄付を資金とし、二〇余才で、東大理学部に籍があつた大谷理学士が、学士院長長岡半太郎氏の委嘱により作業にあたつた。明治末年の二千円が現在ではどの位の価値があるかは想像を絶するが、庭つき一戸建の豪邸が二軒位つくれた

ことは確かである。豊富な資金と学士院、東大を頂点とする権力機構の力も活用して、伊能家をはじめ各地の伊能関連史料を収集して作業が行なわれた。地方では郡役所を通じて史料の提供を求めたところもあつたと伝えられている。

日本学士院には当時の収集と思われる資料類がまとまつて保存されており、伊能中図八舗の模写本まで作られた。作業には多数の協力者も動員されたと推測される。このような膨大な努力で、史料が収集整理されているので、そのあとも、本書を超える濃密な内容の著書は出ていないし、忠敬について書かれた記事は、多かれ少なかれ本書を引用している。大谷氏の専門は地球物理で、のちに京都大学教授となつた。ただ忠敬研究の原典である本書にも幾つか氣のつくことがある。

一、著者は測量器具類と測量法には非常に関心があつたようで記述が詳細である。この分野では資料がなくなっていること、重文指定されていて触れるのが難しいこともあり、現時点からでは大谷氏をこえる調査研究は難しい。また、地図の精度、投影法についても実際の伊能図を検証して論述しているが、現在では残された伊能図は貴重書扱いになつていて、充分な検討は困難である。

残念なのは伊能図の実物が多く残つており、これに自由にアクセス出来たにも拘らず、別冊または図鑑として代表的伊能図を残しておいて呉れなかつたことである。近年、武揚堂版の伊能中図刊行によつて伊能図の研究がかなり進んだことを考えると非常に残念である。

二、忠敬が江戸に出るまで、つまり佐原時代と佐原以前の記述が他の部分と較べると手薄である。小島一仁氏は佐原時代の忠敬に視点を置いて『伊能忠敬』を十数年前に出している。

三、伊能図の所在などの調べが不十分であった。伊能の業績は地図に集約されている。早い機会に調査が行なわれていれば行方不明という

ようなこともなかつたであろう。一応の調査は行なわれているが、本書に記されない図が幾つも発見されている。

四、測量隊員の消息などが余りくわしくない。伊能測量の成果は、從事した個々の隊員も分つべきものであろう。

●保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』一九七四年、古今書院
伊能図を中心とする論文と、忠敬についての資料集からなる。最近増刷が行なわれ入手容易となつた(一万五千円)。高価であるが内容は濃い。大谷著書への批判も随所にみられる。

●小島一仁『伊能忠敬』一九七八年、三省堂選書
前二冊と異なり論文ではなく、読み物なのでとりつき易い。記述の中心は佐原時代の忠敬を強調している。容易に手に入るし安価なので忠敬のおおよそ知るにはよい。(小島氏は本会役員である)

●千葉県史編纂審議会『伊能忠敬書状』一九七三年、千葉県
佐原市の伊能忠敬記念館に保存されている忠敬の書状一六〇通と忠敬三三才のとき妻ミチと出掛けた奥州旅行の記録「奥州紀行」、測量途上で起つた糸魚川事件についての地元庄屋の日記「糸魚川日記」を解説し注釈を加えたものである。書状は忠敬の人柄を知る有力な手がかりである。古本でしか入手できないのが残念である。

●同『千葉県史料近世編』『伊能忠敬測量日記』一九八八年、千葉県
伊能忠敬の測量日記には、日々のできごとを記録した伊能忠敬先生日記五一冊とその清書本二八冊がある。本書は伊能忠敬先生日記を底本とし、清書本の内容を一部加えたものである。時間的には測量開始直前の諸役所とのやりとりから、第五次測量の終了までを対象としている。当初は引き続き第六次以降の測量日記も出版の予定だったと思われるがなぜか公刊されていない。現在では入手はむづかしい。

●佐久間達夫『伊能忠敬測量日記』一九八八年、私家版

元伊能忠敬記念館館長・佐久間達夫氏が、在職中仕事の合間に利用して、個人で測量日記清書本二八冊の解説を行ったもの。全一五冊。

公刊したものではないが、国立国会図書館、千葉県立中央図書館で閲覧することができる。部分的に調査のため必要な場合は直接佐久間氏に問合せて下さい。（佐久間氏は本会役員）

●同『新説・伊能忠敬』自費出版、一九九四年

同『続新説・伊能忠敬』私家版、一九九六年

測量日記、伊能忠敬記念館の史料から、忠敬についての知られざる事実を掘り起こし解説したもの。続篇は追加分である。

●渡辺一郎「最近における伊能図の所在と概況」「地図」三四卷一号

国際地図学会 一九九六年

伊能図の所在ならびに該図の特長について、大谷亮吉、秋岡武次郎両氏の調査を更に追跡し、新たな発見図を加えて、修正した報告である（渡辺氏は本会事務局長）。

●渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』NTT出版、一九九七年

測量日記、伊能図および伊能測量をうけ入れた地元側の記録によって伊能測量の情景を述べ、あわせて一〇回おこなわれた伊能測量と、その都度つくられた伊能図との関係におよび、解明されていない部分が多いことを指摘する。

書籍はこの位にして、本欄のルールにしたがい利用を可能とする史料を紹介する。

●山口県文書館徳山毛利文庫蔵「測量方御用意記」解説文

萩の毛利藩の支藩、徳山毛利藩（三万石）の伊能測量受入れの記録である。雑部、他所之部、奈古方之部の三部からなっている。他所之部は先触れの到着にはじまり他の地域における情報収集の記録、雑部

は自藩における対応状況、奈古方之部は山陰側にある飛地での記録である。

原文は、個人名、船名が列挙されている部分を除いても八〇〇頁の大冊である。その全文を解説したのは、会員の伊藤栄子氏。解説文 A4版 約一一五枚。

研究会ニュース

○会員の松尾昌英さん（筑前の長崎街道を歩くつどい主宰）が佐久間達夫氏の序文付『伊能大図による筑前の長崎街道の追跡』を発刊されました。内容は伊能大図（1/36,000の筑前の長崎街道）を紹介し、既刊の『筑前の長崎街道』のルートを伊能大図によって訂正したものです。定価一、八〇〇円送料別（申込先〒八〇六・〇〇三一 北九州市八幡西区穴生三一一一五、電話〇九三一六二一五五六一・みき書房）

○伊能忠敬研究会のホームページの開設

新会員、特に若い方の増強のため、インターネットのホームページを年初から開設しました。内容は入会案内、活動概要、イベントの紹介となっています。例えば四月二一日より江戸東京博物館にて開催される「伊能忠敬展」で、当研究会の関係するイベントを紹介しています。会員増強が目的ですが、会員の皆様にも見て頂きたいと思います。皆様の御協力により内容を充実していきたいと思いますので、どしどしご意見をお寄せ下さい。

URLは <http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

（ホームページ担当 大友正道）

第六次測量日記

(七)

佐久間 達夫

佐田岬より大洲御領所まで
文化五年七月一八月

同十七日 朝晴曇。先手六ッ前後、二名洲浦出立。先手坂部、柴山、文助、善八、三机浦枝釜木浦字越ノ谷より初、三机浦枝神崎浦迄測、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、二名洲浦（即・旧名いわく二間津浦。二十年以来改正するよし）より初、三机浦枝平磯浦を測、それより三机浦枝釜木浦を歷て同浦字越之浜迄測、先手の初へ合測、先手九ッ前後手九ッ頃神崎浦へ着。止宿（本陣並別宿共）神崎浦組頭祐右衛門（尤別宿長屋）此夜大曇天。暁七ツ前より大雨。

同十八日 朝より雨。午前に至る。同所逗留。地図を成。三机浦菊池宇右衛門出 同人いう。宇和鷲領庄屋百六十人あり。第一清家六郎左衛門（即 日振鷲）、第一日土村兵頭喜右衛門、第三八幡浜 浅井万兵衛なり。当時は第四 三机浦菊池宇右衛門、第五藤岡助之丞（此家は旧家にて 大同より千年も美子相伝の由）なり。下灘浦赤松宇多丞等も同様 第四第五になるよし。此夜曇天不測。

同十九日 朝先手六ッ頃 後手六ッ後神崎浦出立。

後手坂部、柴山、文助、善八、三机浦枝神崎浦より初、三机浦枝田部浦（同断）、小崎浦を歷て同浦字立石迄測、先手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、三机浦枝小鷲浦字立石より初、志津浦、大江浦、三机

浦を歷て同浦字手斧崎迄測、両手共九ッ頃三机浦へ着。止宿庄屋菊池宇右衛門（同宿）、着後吉田郡方中見役二人来る。同領喜木津浦庄屋菊池治郎左衛門来る。

（此家は旧家にて 菊池宇右衛門方の本家のよし。即

字右衛門親に分家といふ）、大洲領郡方中見役平井隼之進（同断）、画図方東寛治来る。此夜晴曇測量。

同二十日 朝晴曇。同所逗留。（坂部、下河辺、青木、稻生は地図）、我等、柴山、文助、佐助、三机浦の内字手斧崎より初（十二日塩成浦際の浜より三

れ浦へ山越峠迄横切へ繋）、それより三机浦の枝足成浦を歷て二見浦の内字大成迄測、九ッ半頃に帰宿。

同二十一日 朝晴（西北風 波浪高）先後手七ツ前後三机浦出立。乗船。先手坂部、柴山、文助、善八、伊方浦枝茅浦（人家は山上にあり）、海辺より初伊方浦枝伊方越浦（此浦も人家山上にあり。此所九日伊方浦枝中浦より伊方越峠迄横切印へ繋ぐ）、それより吉田領広早浦（此浦も人家山上にあり。喜木津浦枝）海辺迄測、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、二見浦字大成浜より初、九町浦地先を過て伊方浦枝茅浦海辺迄測、先手の初へ合測、共に九ッ後吉田領喜木津浦へ着。止宿庄屋菊池治郎左衛門（長屋迄に一同宿）、三机浦菊池宇右衛門来る。宇和鷲領郡方中見役

吉田領成家村庄屋利兵衛本陣詰用闇の由、宇和鷲領磯崎浦庄屋源兵衛、明日止宿に付来る。此夜晴天測量。

同二十二日 朝曇。六ッ前吉田領喜木津浦出立。坂

部、下河辺、稻生地図に先行。我等、柴山、青木、文

助、善八、吉田領毫木津浦枝広早浦海辺より初、喜木津浦下を通、宇和鷲領磯崎浦枝夢永浦、磯崎本浦を歷て宇和鷲領磯崎浦、大洲領同國喜多郡出海村（美は新谷領 大洲の分家也）界越ノ波石迄測、午後に磯崎浦へ帰着。止宿 本陣 庄屋源兵衛。別宿百姓千治（右

磯崎浦石へ出海村庄屋病氣に付梅ノ川村庄屋宇都宮長左衛門立会）。止宿へ吉田郡方中見役銚木作兵衛、浅見伊右衛門、増田惣右衛門、郷目付芝喜三右衛門、白井久兵衛、外に付添白浦庄屋赤松佐左衛門、立間村庄屋山村善治郎、二及浦庄屋菅田仁右衛門、河内村庄屋山下源治郎、安土浦庄屋安之丞、深浦庄屋庄吾等暇乞に出る。大洲郡代手付画図師東官藏、同領用達（大庄屋同様のものよし）菊沢武右衛門、河内小平太郎來る。三机浦菊池宇右衛門 当所迄詰居る。此日度々小雨。午後より雨。夜亦同。

同二十三日 朝より雨（風波あり）同所逗留。日、土村兵頭喜右衛門も此所迄来る。大洲郡方手付菊池文兵衛来る。宇和鷲領は十組なり。御庄組（外海浦、内海浦）、津鷲組（下灘浦、岩松村、高磯村、近家村）、城下組（日振鷲、戸鷲、上波浦、三浦、九鷲、大浦、夷浦、高山浦等也）、矢野組（加室浦、穴浦、舌間浦、八幡浜）、保内組（川野石浦より伊方浦、それより三机浦を回、三机浦、磯崎浦迄）、右海辺村々の

五組、外に山田組、多田組、山奥組、野村組、河原瀬組、岡方五組、海岡共不残十組となる。

同二十四日 朝大蠶天。六ツ頃崎浦出立。乗船

直に同国喜多郡新谷加藤出雲守領出雲村下浦に着。小雨。宇和鷦鷯郡方（下役、又手付共中見役共いう）、都築九右衛門横田儀兵衛、森丈右衛門、小川五郎兵衛、大平村安左衛門、野田村隼太一同団乞に出る。新

谷大洲郡方手付、郡目付付添村役人出迎（姓名は長浜へ着後に出す）。それより手分、後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、宇和鳴新谷領界より初・出雲村（即新谷領）を経て大洲領櫛生村（庄屋水沼利介にて中食）を経、同村字綱掛より初、櫛生村枝須沢、同村枝沖ノ浦を歷て（ヒジ川又長浜川）を渡、長浜町迄測。此日度々雨。八ツ後両共、長浜着。止宿本陣佐々木源三兵衛。細宿平野庭幸右衛門、長浜町老松井庄蔵（本陣詰、別宿詰役人、岡与市右衛門、龜岡惣兵衛）出る。出雲村庄屋卯右衛門病氣に付、代梅ノ川村庄屋宇都宮長左衛門、新谷代官大川惣左衛門、同郡手付筋野佐十郎出る。櫛生村牛糞所へ大洲代官染木昌平出る。同所郡代（手付中目役共）平井隼之進を當領主より使者徒目付宮部惣六来る。我等へ縫布三端中折紙二十束、秀藏へ縫布一端、中折紙七束、佐右衛門、文助、庄作も同断。佐助、善八へ金毛歩宛、藤吉は銀毫兩被下置。佐助、善八、藤吉は金銀相断、中折紙と書る。坂部、柴山、下河辺、青木へ縫布武端、中折紙十束宛、僕四人へ銀毫兩被下置。是も中折紙と書れる。新谷領主より徒目付中山郡兵衛を使使とし。

屋豊治郎、下唐川村庄屋安五郎、皆出る。大洲郡奉行林嘉膳、新谷郡奉行仲村仲一同に出る。此日松山領須賀庫藏、今治領大庄屋池田八兵衛、音柳保弥六、芸州領大庄屋原田十兵衛、同蒲刈鷦鷯庄屋永沢兵右衛門、同畠賀村庄屋田部徳兵衛名来る。着後より終夜雨。

同二十五日 朝大蠶天。同所逗留。地図を成。此日北東風、波浪高し。四ツ後段々に晴天に成。此夜晴天測量。

同二十六日 朝晴天。先手七ツ後長浜出立。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、長浜町内より初、ヒジ川の左に添、大越村、上若松村、加屋村、米津村、八多喜村（此所庄屋新八にて中食）を過て、同村字松葉土手にて、先手の初へ台測、それより川船に乗（足ヒジ川）大洲城下へ着。先手坂部、柴山、文助、善八、八多喜村字松葉土手より初、春ヶ村、五郎村、若宮村（庄屋至助にて中食）、中村（城下城也）を歷て大洲城下本町毛町目測所迄測る。先手は九ツ前、後手九ツ後に着。本陣領主用意宿仮屋主淡路屋直吉、別宿末光清三郎。着後町惣年寄河野多市郎、井上久左衛門出る。

同二十七日 朝大蠶。六ツ後上灘村出立。小雨。坂部、下河辺、稻生、三人は直に伊予郡米湊灘町へ先行地図を成。我等、柴山、青木、文助、佐助、一手にて上灘村より初

同村の内字小網組、我等へ蠟燭一箱（百三十丁入）、秀藏、佐右衛門、文助、庄作へ同一箱（五十丁入）宛被下置。佐助、善八へ銀毫兩宛、藤吉へ銀毫兩。坂部、柴山、下河辺、青木へ蠟燭一箱（八十丁入）宛。右僕四人へ銀毫兩宛被下置。銀は相断蠟燭と書る。右向領より贈物郡方手付菊池文兵衛執斗にて町方へ売払代金にて請取。此夜晴天測量。此日当領より江戸定飛脚出立に付、幸便に脇局へ書状を相頼。

同二十八日 朝大蠶。五ツ半頃より晴天。同國小

松領北条村庄屋黒河丹治、同萩生村庄屋飯尾五郎八見聞に来る。八ツ後大洲城下出立。乗船。ヒジ川を下り、日入頭に長浜へ帰着。止宿同前。

同二十九日 朝晴天。此日三手分。稻生、庄作、甚助、七ツ頃乘船。同國喜多郡大洲領黒ノ田村持青鷲（人家あり）一周を測、八ツ頃帰る。先手七ツ頃に乘船。我等、柴山、下河辺、佐助、浮穴郡大洲領串村枝三ツの尾村を歷て串村に至り、先手初測に合す。先手は四ツ半前、後手は四ツ半後上灘村に着。本陣庄屋都築元三郎、別宿奥崎伝三郎此夜蠶天。三

四星測。

同三十日 朝大蠶。六ツ後上灘村出立。小雨。坂

部、下河辺、稻生、三人は直に伊予郡米湊灘町へ先行地図を成。我等、柴山、青木、文助、佐助、一手にて上灘村より初同村の内字小網組、それより高川村を過、同郡森村字一里塚松迄測、大鹿により乗船、灘町へ着。本陣、宮内小三郎、別宿宮内惣右衛門、着後も雨。大洲當所詰代官小野藤八出る。次戎村庄屋矢野弥兵衛、手成村庄屋繁助、一木村庄

幕に松山領大庄屋須賀庫蔵、同伊与郡大庄屋大改磯右衛門来る。

八月朔日 駿馬先機手共六ヶ半頃 瀬町出立。後

手我等 下河辺、青木、稻生、佐助、瀬町海辺より初

本元藏、風早鶴方大庄屋杉野順藏出。同國越智郡桜井村庄屋庄藏、同國桑村郡桶村南方庄屋伝助、同宮内見間に来る。芸州大庄屋原田十兵衛も出る。此夜靈天則貴、口説後、公山甫參丁氏官渡長谷吉治右衛門貞生

久敷病氣長髮にて出る。」松山領鷲方惣大庄屋杉田
旗五郎^{セイゴン}病中長髮にて出る。風早郡鷲方郡役人長
師村与三右衛門、同鶴村小右衛門出る。芸州大庄屋
原田十兵衛此夜帰國。大曇天不測。

日濱留へ合、それより乘船引帰し、又濱町海辺より順に吾村を通り、松山領同國伊予郡黒田村、筒井村浜村（人家は二三丁上にあり。入江・川邊にて家作よし）、正木川迄測、先手初へ合、先手坂部、柴山、文助、善八、松山領浜村、正木川口より初、筒井村、北河原村、垣生村、温泉郡南吉田村、別府村、山西村（何処の村も海辺より上四五町）を過、和氣郡三津町迄測、九ツ頃着。後手は正木川口より松山馳走

舟青雀丸に乗て出航の所、大船ゆえ引汐に通行陳故
日西落、依之小船に乗、取急て漸七ツ半頃三津町へ

善。止宿唐津屋治郎右衛門。別宿門田屋市五郎。大

津領、松山領界迄大洲郡方手付付添村役人送来る。

松山より郡奉行手付吉川勘兵衛、浦奉行下役山瀬勇

藏、大庄屋大改磯右衛門、惣代渡辺与市左衛門、須

賀庫藏、伊予郡庄屋広助、同永田村庄屋嘉源治、青

雀丸大船頭格小船頭足立忠左衛門、小船頭植木彦六

田中喜多右衛門出迎。大洲領小屋掛、高山村庄屋佐

七郎、東宇山庄村屋喜惣治、多田庄村屋忠右衛門、

田口村莊屋与右衛門、桑野村莊屋又七郎、宇津村莊

剛義古萬門駆けに進む。是、名用者を出す。着後三津

而大拜遜天哥云兵衛、同所著數刃加鑄生左衛門、溫泉

郡大庄屋秀野、惣兵衛、味酒村庄屋吉右衛門、富久村庄

青木、稻生、佐助、右山に添枝御手洗組を過、字號
ケ巣迄測、赤組坂部、柴山、文助、善八、同黒崎鼻
より左山に添、同鳩枝泊村及由良村、門田村（三ヶ
所共組と号す。門田は本浦内五左衛門居）を歷て、
字神崎迄測、赤組は九ヶ後、白組は八ヶ半頃興居鳩
門田組止宿へ着。本陣 別宿共庭内五左衛門（亭主

代金三百疋宛、藤吉同五束代金武百疋（合、金十両三分）、坂部、柴山、下河辺、青木、晒布武端代金千疋宛、僕四人小杉五束宛、代金武百疋宛被下（合、金拾武両）。此夜七月朔日認曆局より御用状、松山へ届されより此所へ相届。
・補外、北河原、垣生町に萬傳川大河也。

同四日 晴天大西風。舟行難成。同所逗留。地圖を
成。此夜盛天。雲間に潤。

同五日 晴天。三手分、名七ツ嶋興居鷲丘立。我等
宵木、文助、甚助、二神鷲の持百合鷲一周を測。八ツ
頃に松山領津和地鷲（又いわく津和地村）着。（興
居鷲より津和地鷲へ六里と百合鷲へ回て舟行八里とい

う)着。坂部、柴山、善八、松山領二神鷲持横櫛一周を測。それより二神鷲へ渡り、同鷲字柵ノ而より初、

右山に添、同鳩字竪浜迄測。下河辺、稻生、佐助、松山領風早郡二神鳩字海ノ浦より赤組と手分、左山に添、二神村を歴て同鳩字竪浜にて赤組へ合測。両

手共九ツ半後津和地鳴（村）著。止宿本陣杉田

雄五郎支配島にて会所別宿
百姓小左衛門、大須領

無須喜鶴（又、村）、村上市郎右衛門出る。（此鶴本

名、無須喜鳴、或は睦月鳴というは誤にて、公儀向無須喜鳴のよし)。大洲部方下役東寛治、三井金助來る。松山領中鳴の内吉木村の百姓、太郎太夫、幸五郎止宿に成よしにて見舞に来る。此夜靈天霊間に測。同六日 前夜八ツ頃、大雨、七ツ頃より小晴、六ツ頃天頂晴る。朝晴靈。同所逗留測。六ツ半頃止宿前より手分、我等、青木、文助、佐助、右山に添、(周防國分諸鳴 情鳴等寅年残し枕を遠測)、同鳴字劍崎迄測、別手へ合、柴山、稻生、善八、左山に添、劍崎迄測、別手へ出立、外に流小鳴一周を測、両手共乗船して八ツ後同鳴止宿へ帰る。

同七日 朝晴天。三手分、津和地鳴出立。我等、下河辺、文助、甚助、七ツ頃乗船、松山領、大洲領入会河辺、文助、甚助、七ツ頃乗船、松山領、大洲領入会クダコ鳴へ着。(此鳴、風早郡にて松山領、大洲領入会十七ヶ村持といふ)夜明を待、右山一周を測、それより松山領中鳴(大洲領にては、忽那鳴といふ)、吉木村、既村持大館湯鳴一周を測、又、松山領、大洲領入会小館湯鳴を測、八ツ頃中鳴吉木村へ着。赤組坂部、柴山、善八、朝六ツ半前大洲領怒和鳴(元、怒和村)、人家前より手分、右山に添て測、丸子崎切戸にて出会。青組青木、稻生、佐助、同前同所より左山に添て測。

同鳴上怒和村人家を過て、丸子崎切戸にて出会。当鳴測終、共に九ツ後松山領、吉木村へ着。止宿 本陣大庄屋、忽那柳太郎(不残一宿)、此日松山領、大洲領入会鳴々へ大洲郡方手付平井隼之進、菊池文兵衛、稻垣甚左衛門、東官治、三井金助出る。伊予國風早郡中鳴

(松山領にて中鳴といふ。大洲領にて忽那鳴といふ)十ヶ村なり。松山領吉木村、既村、畠里村、長師村、宮野村、神浦村(風早郡鳴方大庄屋杉田建五郎居宅也)、熊田村(合七ヶ村なり)、粟井村(大洲領御料所)、大浦村(大洲領御料所と大洲領と分る。故に大浦を二ヶ村ともなす)、小浜村(大洲領御料所)、宇和間村(大洲領)、合四ヶ村共に土村大浦を分れば十二村となる。

同八日 朝霧天。六ツ半頃 中鳴吉木村出立。白組我等、青木、文助、佐助、同村止宿下より初、左山に添、松山領熊田村、大洲領宇和間村、松山領神ノ浦を歷て宮野村境迄測、それより乗船して中鳴の内大浦村へ着。赤組坂部、柴山、善八、吉木村止宿下より右山に添、松山領中鳴の内既村、畠里村を過大洲松山領入会歌崎山通(大洲領御料所)、粟井村字カイナ迄測、白組は九ツ半後、赤組は八ツ後大浦着。大洲領御料所本陣 庄屋、内吉左衛門、別宿百姓善藏。此日両領入会に付、松山領、大洲領郡方浦方手代、並 村鳴役人案内、当鳴(大洲領御料所)御用立場役人、人見伝兵衛(鉢笠のよし)の見舞に出る。此夜青霧 それより晴て測。

同九日 朝霧り段々に晴る。同所逗留。(下河辺、稻生、八日九日地図、両手共七ツ半後出立。乗船、白組我等、青木、文助、佐助、松山領中鳴神浦、宮野村界より初、宮野村、長師村を過、同村小浜村界より松山領長師村、大洲領御料所小浜村入会の高鳴一周を測、

又、長師村、小浜村界より大洲領御料所小浜村の内字大谷迄測て、赤組と合測、赤組坂部、柴山、善八、昨日測終の大洲領御料所粟井村字カイナより初、粟井村を過、大洲領大浦村(大洲領御料所)、大浦村、小浜村より同村字大谷迄測て、白組と出会、両手共四ツ半頃に大浦村(即、大洲領御料所)帰宿。大洲領怒和村庄屋、内吉左衛門、信右衛門、大洲領御料所庄屋小浜村仙之丞、粟井村幸右衛門出る。



伊能図探究 第十四号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図入門（一）

本会の会員諸兄姉には、いまさら伊能図入門でもないが、今年は江戸東京博物館で「伊能忠敬展」が開かれ、多数の伊能図が展示される。実物の迫力を直接に感じて欲しいのであるが、念のため、伊能忠敬が作った日本図、通称伊能図の概略を述べて参考にしていただきたいとおもう。

伊能図の種類

伊能忠敬の測量隊が作成した日本図は一口に伊能図といわれているが、伊能図には大、中、小、の三種類があり、大図は縮尺1/36,000、中図は縮尺1/216,000で、小図が1/432,000である。しかしながら、一〇回におよんだ伊能測量では、第三次測量を除いては、そのつど測量地域の地図を作成しており、そのほかに測量に関係なく作られた図もあった。作成時期別に、伊能図の種類を数えてみると、会報一三号三〇頁の表のとおりで、知られているだけで四四〇種に達する。そして、このうちの一六二種が、副本あるいは写本として現存している。それに昨年秋、気象庁で発見され国立国会図書館に移管された大図の模写本四三枚のうちの四二枚（一枚は既知の図と重複）を加えると二〇四枚となる。作られた図の半分は何らかの形で残っているのである。

伊能図の特徴

つぎに、伊能図の特徴をあげる。

伊能測量の目的は、海岸線の形状と主要街道の経路を明確にするところにあつたので、測量線（以下測線という）は沿海と街道に限られ、内陸部分には空白域が残っている。四国・九州などの遠隔地の測量の帰路を利用して内陸部の測線の追加がおこなわたが、可成りの空白域が残った。特に補充測量の機会がなかつた関東の北東部・奥州には多くの空白な地域がある。

伊能図は手書き地図である。測線を朱線で描き、その両側に彩色した沿道風景を書き加えた。また、測量中、交会法の目標とした著名な山岳・島嶼・岬などの位置と遠景も書き込んでいる。正確な縮尺の測線に加え、地図全体は絵画的に美麗に仕上げられた。伊能図の描図形式は、大、中、小図の別、製作時期、提出先により多少差がある。

（注・交会法とは、位置の確定している目標を見通して、方位を測定し、これまでの測量結果を確認するものである。）

大図では、測線に沿つて居城・陣屋・町並み・社寺・村々・田畠・原野・山景などの沿道風景を絵画風に描き、地名、国名、国界、郡名、郡界、宿駅名などを書き込み、領主名と領界も記した。一口でいふと、朱の測線以外は絵画である。中図・小図のように交会法の目標を見通した朱の方位線は描かれない。経緯線は無いものが多い。天測を実施した地点は記号で示している。

中図では、測線に沿つて地名、国名、郡名を記すが、国界、郡界、宿駅、神祠、寺院、港、天測地点などを記号（地図合印という）で表示する。沿道の山景は概略を記し、経緯線を記入する。交会法で利用した遠隔地の目標には朱の方位線を描き、測定地からの方位を記入する。多数の方位線は、中図の正確さと華麗さを強調している。富士山には特に多数の方位線が集中する。

小図は、中図とほぼ同様で、内容が簡略化されている。地名、国名、

国界、郡名、郡界、宿駅、神祠、寺院、港、などを記号で表示するが、天測地点は省略している。経緯線および交会法の目標への方位線を記入している。

大・中・小図のほかに、特別小図、景勝地を描いた特別地域図、伊豆七島だけの特別大図、江戸府内を対象にした江戸府内図もつくられた。

針穴による製作

伊能図の製作にあたっては、測線のみを描いた測量下図がまず製作された。つぎに地図を描こうとする和紙の上に測量下図を重ね、測線の屈折部を針で突いて和紙に写す。写された針穴を朱線で結べば測線が完結する。そのあと、沿道風景を写生しておいた簡絵図（あらえず）を見て風景を書き加えた。針穴を明けた下図は何回か使うことができた。はじめに下図を描くときも屈折部には針穴が明けられた。

地図用紙を何枚か重ねておいて、同じ作業をすれば複数枚の針穴図をつくることができる。当時の手書き地図で、針穴を使って製作した例はない。原図をつくり、これに複製する用紙をかぶせて敷き写すのが普通であった。伊能図だけが初めから針によって下図を描き、同じ針穴を写して地図を製作した。

針穴を使う地図製作は、測線の信頼性の確保にあったようである。ただ、結果として複数枚重ねて針穴を写すことができたので、測線の精度の高い図を何枚か同時につくることが可能である。そのなか一枚に入念に沿道風景とか図の諸元を書き込み、凡例・付表などをつけて幕府への上呈本（以下正本という）としたのである。また、一枚は、ほぼ正本に準じた形に仕上げて、控え図として伊能家に残された（以下副本という）と考えられる。

正本と副本

伊能家に残っていた副本は、一九六一年（昭和三二）に殆どすべて佐原市の伊能忠敬記念館（以下伊能記念館という）に寄付されているが、これらの諸図は正本と全く同じに仕上げられているわけではないと推測される。例えば、文化元年提出の日本東半部沿海地図（以下沿海地図と略称する）は伊能諸図の中では有名な図であるが、伊能記念館所蔵の中図には付表が描かれていないし、正式な題名も書いていない。ところが、諸侯への献呈された沿海地図中図、例えば国立史料館蔵（津軽藩旧蔵）の図では、題名はないが、付表・凡例ともに描かれている。諸侯への献呈図が正本とどの程度似ていたかはわからないが、記念館の副本とちがっていることは確かである。

つまり、手書きであるがゆえに、仕上げの程度には提出先によつて多少差がみられる。複数枚重ねて針穴を明けた地図紙を用いて、提出用（正本）、控え図用（副本）、諸侯への提供用等、用途に応じて記入内容、彩色、付表、凡例、題名、識語などの、いわば完成度を若干変えて仕立てられたのではなかろうか。

筆者は、現存する伊能図の来歴上のちがいをつぎのように区分している。

一、正本 幕府に提出されたもの（天文方への提出図を含む）。

二、副本 針穴があり、伊能グループの製作（忠敬の死後を含む）であることが確かで、完成度が伊能記念館の伊能諸図と同等以上のもの。

三、複製本 針穴があつて、伊能グループの製作が明らかながら、未完成または、完成度が伊能記念館の伊能図よりも低いもの。

四、写本 江戸期に副本を写したもの。

五、模写本 明治以降、原形保存または利用目的で手書きで写されたもの。

一般論としては針穴の見られる図がよいものであるが、写本・模写本であっても、原本も良く丁寧に筆写されれば、理論上原形に近い伊能図をつくることができる。そのような優秀な図も多数現存する。

最近、気象庁で発見された模写本もそのようなものの一つである。忠敬の江戸日記をみてゆくと、伊能忠敬の在世中から伊能図が貸し出されている(『伊能忠敬研究』10号)。当時から写本は存在したと考えられる。

一八〇〇年(寛政十二)提出図

第一次の蝦夷地測量でつくられた図は大図と小図だけである。大図は蝦夷地一〇枚、奥州街道一枚にまとめ、小図は全体を一枚にまとめられた。伊能記念館にある小図を眺めると、蝦夷地の東南岸は若干地勢を描き彩色するが、奥州街道は殆ど一本の線で、今の地図と比較すると何の変哲もない地図である。しかし、北海道の東南岸は現在の地形と同じようにしっかりと描かれている。また、国立歴史民俗博物館の秋岡コレクションの奥州街道の二枚の大図を見ると、朱の実測線の両側に絵画風に景観を描き、正確な縮尺による街道の表示とともに当時の絵図的表現に留意したことがわかる。

これらの地図を見て、幕府の要路の人達は感心した。当時の絵図とは異なる何物かを感じとったのである。老中の松平伊豆守信明がこれを見て、関東一円も測量できるだろう、と云つたという話がある。高橋至時も間重富への書簡のなかで、思った以上のよい仕上がりだったと喜んでいる。第一次測量の伊能図は、測量の試みとして若干の補

助を与えられた伊能測量が、いわば一次試験に合格した意味合いがあるのだろう。

一八〇二年(享和二)提出図

第二次測量では、当時最も関心が高かった伊豆から関東ならびに奥州沿岸の測量を命じられ、蝦夷地も含めて地図をつくることになった。第二次測量で作成された伊能図の中図が早稲田大学図書館に所蔵されている。このときの中図は同大学と伊能記念館のみにしか所蔵されないが、記念館の図は関東南部が欠本である。早稲田大学の中図は二舡構成で(上呈図は四舡構成)、蝦夷東南岸から伊豆半島までを現在の地図と同じような形に描かれている。

評価は充分に出来なくとも、必要部分を確からしく表現された享和二年上呈図に幕閣は充分満足したのであろう。伊能測量は第二次試験に合格した。このあと、伊能隊の待遇が急激に上昇している。これまで賃金を払っていた荷物運搬の馬や人足は、道中奉行・勘定奉行の先触れによって無料となり、費用の一割か三割しか貰えなかつた補助金がほぼ一〇〇%となつた。

第三・四次測量の図

第三次の羽越測量、第四次の東海・北陸沿岸測量では、中間報告の地図は作られていない。第三次測量を始めるときに、実力はわかつたので、東日本全体の地図をつくる方針が大体固まり、中間図はもうよい、ということになつたのではないだろうか。

それでも、疑心暗鬼の藩もあった。忠敬は自信をもつて測量旅行をしていたが、弘前、秋田、糸魚川などで小さなトラブルが起きている。加賀藩では多数の人足を出し、きちんと案内人をつけているが、村高、

家数、などの問い合わせには答えさせず、村郡の境界毎の距離を測ることも拒否した。東日本図完成を目指して黙々と作業した伊能隊の様子は受け入れた地元側の文書に生きしく記録されている。

一八〇四年（文化元）提出 日本東半部沿海地図

本図は、最終版以外の伊能日本図群のなかで最も有名な図である。またの名を日本東三十三国沿海地図ともいう。長いので沿海地図と省略して呼んでいる。一八〇〇年（寛政二）に蝦夷地測量を始めてから五年かかって、尾張・越前以東の海岸線の測量（沿海測量）を終わり、四回の測量の成果を一つの図にまとめて幕府に提出したものである。大図六九枚、中図三枚、小図一枚からなっている。縮尺は最終版と同じである。

提出は、一八〇四年（文化元）八月であるが、九月六日に將軍家斉が城中で閲覧したことが続徳川実記に書かれている。（注・年月日は旧暦である）大図は一枚がほぼ一枚の大きさ、中図、小図は二畳から三畳の広さがある。大図を日本列島の形に広げて閲覧するには、約四百畳の広さが必要である。お城の大広間でもなければとても並べることはできない。

將軍は老中・若年寄・勘定奉行などを従えて閲覧し、感嘆の言葉を発したのではないかとおもう。若年寄には伊能測量の担当で、国立国会図書館蔵の沿海地図小図（一）の旧蔵者堀田摂津守がいた。同じく同館蔵の沿海地図小図（二）の旧蔵者中川飛騨守は勘定奉行であった。この閲覧により伊能忠敬は低い身分だが幕臣（御家人）に取り立てられ、以後の測量は幕府の直営事業となつた。さらに、支援を確実にするため、諸藩には老中戸田采女正から勘定奉行経由で通達が出されている。西国筋では忠敬は幕臣として槍を立てて測量に従事した。

一八〇七年以降の提出図

伊能測量は沿海地図以前と以後は、はつきり区別して考えなければならない。沿海地図以前の四回の測量は、御用の旗を立て、測量命令を受けてはいるが、実態は伊能忠敬の個人事業に幕府が補助金を出したものである。引き連れた隊員は内弟子と従者のみであった。

転機となつた沿海地図の大図は控え図（副本）六九枚揃つて伊能記念館に現存する。展観されることが少なく傷んでいない。幕閣が感心したのは大図だったろう。中図、小図では、精緻ではあっても迫力は少ない。大図のすべてを接続して、將軍家斉が見たと同じような形で眺めれば、ものすごい迫力がある地図となるであろう。

沿海地図の大成功は、当時かなり話題になつて諸侯からの入手希望も多かったようである。伊能諸図のなかで沿海地図が最も多数現存している。伊能グループで製作したもの以外に写しもつくられた。写本も含めると、次のように各地に現存している。

津軽家伝来の沿海中図、沿海小図が国立史料館に、伊達家伝来の中図が宮城県図書館に、古河の土井家の小図は古河歴史博物館に、尾張家の陪臣大道寺家の小図が蓬左文庫に、徳島藩の中図が徳島大学図書館に、というような形である。このほか、前掲の国立国会図書館には堀田家・中川家の小図があり、伊能記念館にも中図三枚が揃つてある。來歴不詳ながら学習院大学にも沿海地図中図があり、最近、イタリアにもカナ書きの中図があることがわかつた。まだまだ知られていない沿海地図はありそうである。

一八〇五年（文化二）以降は、幕府の測量隊として体制が整い、沿道諸藩からは手厚い援助を受けたが測量の速度は遅くなつた。自費測量では、難しい三陸海岸等は必ずしも忠実に沿岸沿いに測量していく

いが、御用測量では西国のみといった海岸も丁寧に沿岸を測り、細かい離島まで測量されている。

幕府測量隊となつてからの中間報告図で現存しているものは、一八〇七年（文化四）に提出された中国沿海と畿内・東海の沿海図の中図二舗、特別地域図の琵琶湖、天の橋立、嚴島図、および一八〇九年（文化五）の四国淡路島の中図・小図、ならびに一八二一年（文化八）の九州第一次測量の中図・小図、同じく九州測量時の大図約十種で、あまり多くはない。遠隔地の測量の帰途を利用して中部・畿内・中国とか九州の内陸部の測線を増やしたため、改訂は必須であり、中間報告図の作成には力を入れなかつたようである。

それでも測量旅行の間隙を利用して諸侯の要望に応じて、それまでの中間図を調製して提供した地図集が残っている。一方、忠敬自身としても、第一回の幕府測量隊として新機軸を打ち出さねばならなかつたのである。結果として伊能図に華麗さが加えられた。琵琶湖図、嚴島図など贈呈用の地図は勿論だが、測量図としても中国沿岸測量以降は、沿海地図とはかなり調子の変わった彩色を施している。

畿内・中国沿海地図

第五次測量の上皇図の控えは、伊能記念館に「東海道歴紀州中国到越前沿海図」という長い名前をつけて一組保存されている。一組は伊能家の所有であるが、これまでのいずれの図よりも濃い色彩で、彩色の範囲も広げ、平地の部分にも着色している。同図は記念館以外では、徳島大学図書館、学習院大学図書館、宮城県図書館にも保存されていて、何れも記念館所蔵図よりむしろ華麗である。特に徳島大学所蔵の徳島藩蜂須賀家旧蔵の一八〇七年（文化四）上呈の中図副本は、一八〇八年（文化五）の四国測量以後に作られたものであるが、彩色が濃

く美しい。四国測量、九州測量の中間図はいくつも残っていないが、大体同じ系統の彩色で、少しづつ調子を変えており、最終図を目指して試行が繰り返された感じがする。なかには、伊能図のなかで美観的に一番美しいとみられる東京国立博物館蔵（豊橋藩大河内家旧蔵）の中図と同様な彩色の図も含まれている。

伊能記念館の伊能図

伊能記念館には今なお多数の伊能図が所蔵されており、九六輪に達する。周知のとおり、伊能家にあつた最終版伊能図の副本は明治期に再提出して、関東大震災で焼失したため、残つていなのは大変残念だが、一つの施設としては最も多くの伊能図副本を所蔵する。

伊能記念館の地図を熟覧していく感ずるが、前掲のようにこれらの諸図はあくまで控え図であつて、上呈図と同じに仕上げられたものではないようである。再度作れと云われたときは、控えを写すのではなく、控え図を参考にして新たに作るという発想だったのではなかろうか。

測量データは別に資料があり、測線だけを描いた測量下図もある。測量下図を集成した中図・小図用の定稿図もある。測線沿いに描くべき風景を記した簡絵図が揃っている。これら資料があれば、あとは彩色だけを決めて地図を作ることが可能だつたろう。彩色の濃淡とか沿道風景の精粗は、提出先の要望により個別に決められたような感じがする。控え図は仕上げのイメージだけを伝えればよかつたのであろう。そう考えると、付表がなかつたり、凡例がないことの納得がゆく。付表は何を付けてもよいのだから、大体は決まつていいが固定されとはいない。凡例の内容、掲載位置などもそうである。

しかし、そのような条件を入れて考えても、伊能記念館の伊能図に

は素晴らしいものが多い。

一八二一年（文政四）提出最終版伊能図

最終版伊能図は一八二一年（文政四）に提出された。正式な名称を大日本沿海輿地全図という。地図の提出と同時に大日本沿海実測録という実測記録も提出した。最終版（大日本沿海輿地全図は呼称が長いので以下は略して最終版という）は大図二一四枚、中図八枚、小図三枚の膨大なものだった。

忠敬は一八一八年（文政元）に病没していたので、上司の高橋景保の監督の下で関係者が作業継続して製作した。地図完成後、景保は忠敬の孫忠誨（息子景敬はすでに没していた）と下役らを伴って登城し、老中・若年寄の前に、西半分の大図を接続して御覽に入れ、上呈を終わった。このたびは將軍の閲覧はなかった。

上呈図の姿は、大谷亮吉氏が『伊能忠敬』のなかで、久保木清淵の手記を引用して述べている。大図は一巻およそ七枚、一箱に五巻、全部で六箱三〇巻という。箱は桐箱である。中図は八枚を二巻、小図は三枚を一巻として両図を一箱に納めたとある。これらは幕府から明治政府に引き継がれ、紅葉山文庫にあったが、明治六年に皇居炎上の際に焼失したと大谷亮吉氏はいう。

しかし、紅葉山文庫の最終版伊能図の焼失については、何となく割り切れない感じがしてならない。同じ紅葉山文庫にあった他の内容の低い伊能図、例えば日本海路測量之図（沿海地図小図のあまり丁寧でない写本）とか、幕末の筆写とおもわれる蝦夷地の大図の写本なども国立公文書館内閣文庫に残っている。江戸城火災の際、いくら伊能図のボリュームが多いからといつても、写本類を持ち出して、良い物を燃してしまったのであろうか。

当時から伊能図は有名であつたし、誰が見ても伊能図の価値はわかっていたので、火災あるいは明治維新の混乱の際にでもコッソリ持ち出され、どこかに保存されていないだろうかと想つたりしている。

明治初年、急速に生じた地図整備の必要から、伊能家にあつた控え図（副本）を提出させたが、これが東京大学に保管中に関東大震災で焼失したというのが定説である。

最終版の上呈本伊能図、すなわち大日本沿海輿地全図はすべて失われたとして、その面影を止める諸図を挙げてみる。

最終版大図

まず大図である。最終版大図で来歴が確かなものは、長崎県平戸の松浦史料博物館蔵の壱岐、五島、長崎・佐世保および平戸領を描く五舗（以下松浦大図という）のみである。壱岐を除いては最終版大図と描画範囲が一致しないかもしれないが、本図は添え書があつて来歴は確かである。藩主から忠敬に依頼してあつたが、忠敬の没後、一八二二年（文政五）に内弟子の保木敬藏の斡旋で高橋景保から入手したものである。忠敬の在府中の日記にも符合する記録がある。最終版提出以後に作られた伊能図であるが、針穴があつて、伊能グループの下河辺政五郎が中心となつてまとめたものなので、副本と考えられる。

大図は余りにも浩瀚であったので、いくら諸侯でも、一式全部の写しが欲しいという藩は無かつたらしい。自領のみの部分的なものに止まっている。国立歴史民俗博物館蔵の秋岡コレクションに写本三舗（以下歴博大図という）、山口県公文書館毛利文庫に七舗（針穴がある。毛利大図という）があり、平戸の松浦史料博物館の五舗を加えて合計十五舗にとどまっている。歴博大図は、長野県の飯山、兵庫県明石、岡山県の児島湾付近のもので、描画・彩色とも良い図であるが、旧蔵

者秋岡博士が書店から求められたもので来歴は不明である(写本)。

毛利大図七枚は毛利藩に伝えられたもので、藩領の防長両国の分である。御両国測量絵図と題して保存されている。最終版大図の図割りと一部合わないが大体一致する。描図は丁寧で、彩色も美しく、針穴がある。伊能グループが毛利侯の依頼により製作したものであろう。このほか、京都大学図書館には、忠敬から土浦の内田氏に贈られたと添え書きのある大図の下書きが九枚所蔵されている。これらは下書き(未完成の複製本)と試作図だが、なかで壱岐と五島(二舗構成)の三舗は、作図後地名の大きさを朱で修正したり、校合の印があるが、仕上がりとしては前記の完成図に近いものである。

最終版中図

最終版中図として著名なのは、東京国立博物館蔵の八枚揃い(以下東博中図)であるが、本図は豊橋藩大河内家に伝えられたもので、伊能測量当時の当主信明は老中をしていた。来歴が確かであり、針穴があるので、伊能グループの製作と考えられる。本図は副本といえる図である。

成田山仏教図書館蔵の八枚揃い(以下成田中図)は、東博中図と比較して彩色が淡彩であるが、東博中図にない天測地点の記入があるほか、東博中図の記入内容はすべて揃っていて完成度が高い。針穴はなく、伊能グループ以外の手による写しである。来歴は不明で、一九四〇年(昭和一五)書店から購入された。

成田中図の来歴について「幕末の老中であった佐倉藩・堀田家にあつたものではないか」との見方がある。状況からみて可能性は高いが、確定するためには今後の研究が必要である。

何故かかる優秀な中図がフランスに渡ったかは、推測の域を出ないが、諸侯あるいは幕府の所蔵図を幕末に雇用されていたフランス軍人が持ち帰ったのではないかと考えている。発見された家は一八四八年の建築で、イブ氏夫人の祖父が購入し、母が継承していたのを生前に譲渡された。母の存命中は家に手を加えるのを嫌ったが、二五年前にイレ中図は針穴も鮮明に認識される。

その他の中図では、東京大学総合研究博物館所蔵の中図(以下東大中図)が注目に値する。関東が欠本で七舗しかなく、うち北海道の二舗は別系統の最終版中図であるが、中部・中四国・九州北・九州南・東北の五舗は、傷・虫も多いが描図・彩色が良く、針穴も認識できる。東京大学の事務室の隅にあったというが、関東大震災で焼けたという伊能家再提出の副本の一部の可能性がある。前掲文のように副本といっても控え図であって、正本とは可成りの差が考えられるから、東大中図五舗が副本であってもおかしくはない。今後、調査を続けたいと考えている。

以上その他に最終版伊能中図の模写本(明治期の写)としては、国土地理院蔵の中図六舗(北海道の二舗を欠く)と、日本学士院の中図がある。国土地理院の中図は明治の初期に陸軍参謀局が模写したもので、

筆写にあたり、描図法をかえたり、合印を近代的な表示に直したりしている。日本学士院所蔵の中図は、大谷亮吉氏が『伊能忠敬』を書いた際、資料として東大にあった副本を明治四二年に模写させたもので、原形保存を目的とする模写本である。

最終版小図

小図については、大谷亮吉氏は『伊能忠敬』において、非常に簡便なので多数複製されたというが、現存しているものは非常に少ない。三枚揃いは、英國海軍水路部の所有する一セットのみである。本図は幕末に日本近海を測量にきた英國の測量艦隊に渡されたもので、幕府軍艦方の旧藏品である。

国内では、神戸市立博物館に蝦夷地と日本西南部の二舗を所蔵するほか、幕末に老中をつとめた福山藩主阿部正弘の後裔の正道氏が蝦夷地の図一舗（以下阿部小図という）を所蔵するのみである。大谷氏は、沿海地図の小図と混同していたのであろう。

三カ所にしかない小図は、共通して丁寧に製図された美しいものである。そして針穴がないことも共通している。旧幕府軍艦方の所蔵図も伊能グループの製作ではなかった。これらは、おそらく幕末のある時期に必要があつて原図から敷き写されたものとおもわれる。阿部氏の談によれば、阿部小図は福山藩が蝦夷地の經營に責任を持ったときを作られたもので、実際に阿部家へ入庫したのは明治になつてからであつたという。神戸市立博物館蔵の華麗な小図二舗も、どこかの大名家が幕末に写させたものと推測している。

厳密には最終版小図といえないかもしれないが、松浦史料博物館（平戸）に、松浦大図と同時に高橋景保から渡された九州だけの小図が所蔵されている。一八二三年（文政五）に伊能グループの下河辺政

五郎・保木敬藏らにより納められたもので、針穴も鮮明な副本である。彩色は淡彩で、文字は達筆、他の小図と記載内容、合印は同じで、方位線・緯線もあるが、経線がない。贈呈用で地図と接続する必要がないから、接合記号はない。方位を示すコンパスローブスが一個ある。

特殊な伊能図

学習院大学の図書館に、領主名の記入された中図（以下学習院中図という）が所蔵されている。針穴はなく写本である。保柳睦美氏は、伊能グループによる試作的な意味を含め特殊中図と名付けたが、この分類は必ずしも適当ではなさそうである。

中図でありながら、大図にのみ書かれている幕府領、大名領、寺社領などの領主名が記入されており、そのこと自体が特殊であることは間違いない。しかし、地図そのものは、一八〇四年（文化元）の沿海地図の中図、一八〇七年（文化四）の中図（畿内・中国）ならびに一八〇九年（文化六）の中図（四国）の集合である。

沿海地図の中図の上皇図は、関東・中部・奥州、蝦夷地の三舗構成であるが、学習院中図は関東と中部を二分し、奥州も南・北で二分しても伊能グループの製作ではなかった。これらは、おそらく幕末のある時期に必要があつて原図から敷き写されたものとおもわれる。阿部氏の談によれば、阿部小図は福山藩が蝦夷地の經營に責任を持ったときを作られたもので、実際に阿部家へ入庫したのは明治になつてからである。

（次号へ続く）

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

- ① 本会報の発行 当面年四回。

- ② 例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

- ③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

このところ忠敬に対する関心が急激に高まりつつあります。最近世に出た私たちの会の渡辺一郎事務局長の著書『伊能測量隊まかり通る』(NTT出版)が売れ行き、評判とともにとてもよいことや、昨年秋に伊能大図が四三枚発見されたというニュースが各新聞テレビで大々的に報道されることなどに、それが現れています。

そして今年から二一世紀にかけて、伊能忠敬をテーマにした大きなムーブメントがいくつか計画されています。

① 江戸東京博物館による「伊能忠敬展」

② 俳優座による伊能忠敬を主人公とする演劇、映画、テレビ番組

- ③ 日本歩け歩け協会による「伊能忠敬キャラバン隊全国踏破キャンペーン—ニッポンを歩こう」というイベント

これら三つの催し物は、朝日新聞社が創刊一二〇周年記念イベントと位置づけ、共催することになっています。もちろん伊能忠敬研究会もこれらの計画に深く関わっています。

以上のような状況の中で、私たちは会員を増やしてより積極的な活動を展開したいと思っております。みなさまの入会をお待ちします。

・入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記

載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 ○○一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

(広報担当／佐藤嘉尚)

* 本誌の編集委員は次の方々です(50音順、敬称略)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禎良(前佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・斎藤仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭・法政大学講師)・芳賀啓(柏書房専務取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探求会代表・会社会長)

編集後記

●はじめまして! 今回初めて編集委員会のお手伝いをさせていただきました。若輩ですがよろしくお願ひいたします。

歩くことが好きなフツーの主婦ですが、いつの日か測量日記に基づいて日本全国を歩いてみたいと思っています。

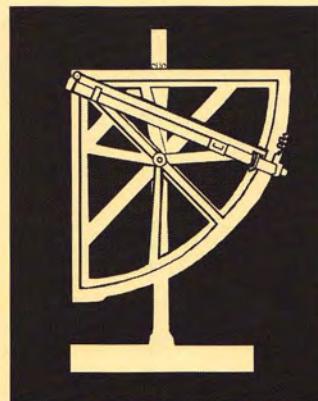
会報中の史料紹介では、忠敬をはじめ忠敬を取り巻く人物の人間性を生き生きと甦らせてくれ、その人物の魅力に惹かれてしまします。ワープロ全盛の活字社会となつたこの頃、自らの文字で書き記して記録を残すことの大切さを、私は感じています。これからも諸先輩の方の足を引っ張らないようがんばっていきたいと思っています。(岡)

●会員の根岸泉さんが亡くなられました。あんなにやる気満々で、研究会のことも力になっていただけると期待していたのですが、一月八日、心不全で急逝されました。謹んでお悔やみ申し上げます。(渡)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.14 Winter 1998



ESSAYS

Tadataka's study of calendar in Sawara Period	KAWAJIRI Nobuo 1
History and Topography of Goto in Ino's Land Survey Diary	MATONO Keishi 6

MATERIALS

Family Document	ANDO Yukiko 10
Onobu-san	INO Yoko 15
Nanorigaki	
Reference Books and Materials	18
TOPICS	20

INO'S LAND SURVEY DIARY

The Sixth Survey Diary (7)	SAKUMA Tatsuo 21
----------------------------------	------------------

THE SEARCH FOR INO'S MAPS

WATANABE Ichiro 25

OTHER NEWS

33

Edited and Published

by

THE INO TADATAKA SOCIETY